

---

# グラハム「抱きしめたいな、IS！」

ななな

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

グラハム「抱きしめたいな、IS！」

### 【Nコード】

N0068U

### 【作者名】

ななな

### 【あらすじ】

これは、SS速報VIPに投稿しているSS『グラハム「抱きしめたいな、IS！」』と同じものです。投稿者は作者ですので安心してください。いろいろな人に見てもらいたい気持ちがあったので重複投稿しちゃいました、テヘツ……………すいません。

内容は、劇場版ガンダム00で特攻したグラハム・エーカー少佐がIS世界に飛ばされたという設定で進行します。一夏ももちろん登場します！・・・が、原作のようにハーレムとは

行きません、ヒロインの数人はハムさんと接近します。ですのでNTRが許せない方はお引き取りください。

基本的に会話文だけで話が進行していきます。

地の文も書けや、ボケ！となる人もご遠慮ください、すいません。

以上を読んで、「ノープロブレムだ！」な人はどうぞ！

## 目覚め、邂逅（前書き）

初のSSになっております。キャラ崩壊を含みます。拙いところ、矛盾、設定の勘違いがあるとおもいますので指摘お願いします。作者の好きなキャラをつかった、自己満の塊ですが楽しんで頂けたら幸いです。

## 目覚め、邂逅

グラ「・・・ッ、む？此処はどこだ？見たところ何処かの格納庫のようだが。」

グラ「私は一体何を・・・ッ！そうだ、少年は？ELSはどうなった！」

グラ「それに私は・・・。ここは天国だともいうのか？いや、私の場合地獄か。」

グラ「・・・ええい、考えていても埒が明かな。とりあえず辺りを散策してみるか。」キョロキョロ

グラ「ここは、軍のドッグか？それにしても妙な感覚がするが・・・ん？」

グラ「これは・・・強化装甲？サイズ的に見てMSではなく人用のパワードスーツのようだな。」

グラ「私がまったく見たことのない物だ。ここは何処かの研究所の中か？」ペタッ

グラ「なにッ！？・・・今の奇妙な感覚は一体？それに淡く光って、コンソールまで立ち上ってしまったな。起動させてしまったか。」

千冬「誰だ！そこで何をしている？」

グラ（日本語、日本人か。此処の研究員かなに قادろうか。丁度良い聞きたいことが山ほどある。）

千冬「もう一度聞く。そこで何をしている？」

グラ「すまない、勝手に触ってしまった。私は地球連邦軍ソルブレイヴス隊所属グラハム・エーカー少佐だ。この施設の詳細とE L Sがどうなったかお聞かせ願いたい。」

千冬「地球連邦軍？E L S？何を言っているお前は。ここは、I S学園だが。」

グラ（どういうことだ？E L Sの事件を知らないのか？いや、地球連邦まで知らないのはおかしい。それにI S学園？）

千冬「お前が何を言っているのか分からんが、もう一度聞く此処で何をしている？何処から入ってきた？」

グラ「本当に知らないのか？地球連邦とELSを。」

千冬「だから、なんだそれは？いいから質問に答えろ。」

グラ「気付いたら、此処に倒れていた。」

千冬「何？それはどういうk」

グラ「さあ、質問に答えたぞ。今度は私の質問に答えてもらおう。」

千冬「今度はって、さっきから好き勝手質問しているのはどいつだ。」

グラ「問答無用！此処はどこだ？」

千冬「だからIS学園だ。」

グラ「国は？」

千冬「日本だ。」

グラ「IS学園とは何だ？」

千冬「・・・本気で聞いているのか？IS、すなわちインフィニット・ストラトスの操縦者を育てる教育機関だ。」

グラ「インフィニット・ストラトスだと？」

千冬「それも、知らないのか！？人用のマルチフォーム・スーツだ、丁度お前の後ろにあゝ・・・。お前！ISを起動させたのか？」

グラ「ああ、すまない。触ったら起動してしまった。まずかったのか？」

千冬「ISについて補足すると、ISを起動できるのは女性だけだ。お前は男だよな？どうやって起動した？」

グラ「わからない。触ったら起動したと言えん。」

千冬「本当か？」



グラ「嘘偽りはないと誓わせてもらおう」

千冬「・・・その目に免じて一応信じてやろう」

グラ「さっきの反応からするとISとは誰でも知っているものなのか？」

千冬「ああ、一般常識といっても差し支えないだろう。」

グラ（・・・）

グラ「ちなみに、今は西暦何年だ？」

千冬「おかしなことを聞くな。今は20xx年だ。」

グラ（！？この様子からすると、嘘は言っていない。だが300年近く前だと？それにISという存在。私の記憶にはないし、おそらく元の記録にもないだろう。信じがたいがこれは・・・）

千冬「さて、お前の質問に答えてやったんだ。今度は私の質問に全て答えてもらうぞ、少年。」

グラ「・・・いくら私が若く見えるからといって30を越えた人間に少年はやめて頂きたい。」

千冬「何回私にこう言わせる気だ。何を言っているんだ？何処から見ても齡15、6の少年だろう。」

グラ（・・・）鏡のように磨かれたISに移る自分をチラッ

グラ「・・・乙女座の運命はこうも数奇なものなのか。」

-----

その後私はあの女性、織斑 千冬とっていたな、に自分の過去を話した。つまり此処かはたまた別の世界の西暦2314年に自分は居たこと。

そしてELSという未知の来訪者との戦いに軍人として参加し特攻したこと、そして気付いたら此処に15、6歳に若返って倒れていたことをだ。

当然、信じてはくれなかったが悪意や敵意がないことは分かってもらえたらしい。私がここに居た事や身元が不明なことは学園に入学するという条件付きで不問となった。

どうやら私が考える以上にIS？とやらが男に動かせることは異常で重要らしい。私以外には世界に1人しかいないとのことだ。



## 織斑 一夏とグラハム・スペシャル

真耶「はい、皆さん席に着いてください。朝のHRを始めますよ。皆さん！学校が始まってまだ2日目ですけど、今日はなんと転校生の紹介があります！グラハム君入ってきてください。」

グラ「失礼する。」ガラッ

女子S「・・・・・・・・」

グラ「グラハム・エーカーだ。出身はユニ・・・アメリカ、以後よろしく頼む。」

女子S「・・・・・・・・」

グラ「?よろしくと言っている!」

女子S「・・・キャアアアアアアアア!!」

グラ（!?なんだこれは、音の爆弾のようなものだな。流石は武士道の国日本！これに耐えるのが漢か。）

女子1「すごい、男子！二人目の男子！！金髪、イケメンだよ！」

女子2「私1組で本当によかった。織斑君もいるしサイコーだよ！」

女子3「ああ、こんなに嬉しいことは無い。」

一夏（へへ、俺以外にもいたんだな男でIS使える奴。よし！正直  
周り女子ばかりできついからな、知り合い筈と千冬姉だけだし。渡  
りに舟だぜ。）

千冬「ふう、まったく何でもこう毎回騒がしいんだ。静かにしろ！」

一同「シーン」

千冬「よし。次は学校が始まって早速だがISの実技訓練を行う。  
これは現在の諸君達がどれだけISを動かせるかを計るために行う。  
全員ISスーツに着替えてグラウンドに集合しろ。」

千冬「あと、織斑はグラハムを案内してやれ。お前もなれていない  
だろうがグラハムよりはましだろう。」

一夏「わかった、千冬姉」

千冬「わかりました、だ。そして織斑先生だ、馬鹿者。」出席簿ア  
タック！

一夏（痛い・・・）

一夏「よオ！オレ 織斑 一夏ってゆーんだ！！ヨロシクな！！」

グラ「ああ、私はグラハム・エーカーだ。よろしくたのむ。」

一夏（す、滑った。はずっ／＼、てかなんでこんな自己紹介したんだ？俺。なにか大きな力が働いた気がする。）

グラ「考え込んでいるところ申し訳ないが、退室しなければ変態のそしりは免れないぞ」

一夏「ああ、そうだった。急がなくちゃ！第3アリーナは唯でさえ  
遠いし」ダッ

一夏「今日もやっぱり・・・そら来たよ！はあ。」

他クラス女子1「織斑君と転校生を発見！者ども出会え〜！！」

一夏「くそ、囲まれると遅刻は必至だ。グラハム、全速力で駆け抜けるぞ！」ダッダッ

グラ「現在の状況についていけないがその旨をよしとする。」ダッダッ

他女子s「逃げたわよ！追え、追え〜！」

一夏「はあ、はあ。ここを曲がれば直ぐだ！」

ザッ

他女子2「ところがギッチョン！！ここは通さないわよ織斑君。私達にも転校生とお話させてもらっ。」

一夏「糞、ならこっちで行けb」

他女子3「馬鹿は来る！」ザッ

一夏「こっちもかよ!？」

グラ「くっ、いつの間にか囲まれているぞ!これでは遅刻は免れな  
いだろうな。・・・だが、」グッ

一夏「グラハム、何を？」

グラ「そんな道理、私の無理でこじ開ける!」ズダッダン

他女子s「何いい!？」

グラ「フハハハ!人呼んで、グラハムスペシャル!」

-----



**織斑 一夏とグラハム・スペシャル（後書き）**

お付き合い頂きありがとうございました！  
よろしければ、感想をば

「千冬姉!」「千冬女史!」「・・・だから織斑先生だ」

-----

一夏「はあ、ふう。何とか切り抜けられたな。これなら急いで着替えれば間に合うぞ。」脱衣

一夏「それにしても、すごいなグラハム。あそこを壁ジャンプで八艘飛びみたいにして切り抜けるなんてさ、しかも俺を担いで」

グラ「私は我慢弱く、落ち着きのない男なのさ。しかも、姑息な真似をする輩が大の嫌いときている。ナンセンスだが動かすには無理ない。」脱衣

グラ「それにしても、若いとはいいいものだな。昔の私ではせいぜい1人で逃げるのが限界だった。」更衣中

一夏「?まるで、昔のほうが老いていたみたいな言い方だな(笑)」更衣中

グラ「さてね。ところで、なぜ女子たちはあのように突撃してきたのだ?今日は何かのイベントの日なのか?」

一夏「いや、普通の日だぜ。男でISを使えるってのが珍しいんだろ。その内落ち着くだろうけどさ。」更衣完了

グラ（珍しいだけで、あの鬼気迫る群がりよう……。さすがは日本。おそらくこれも武士の鍛錬の一つなのだろう。）更衣完了

一夏「よし、着替え終わったな。行こうぜ！」プシュー（扉が開く音）

他女子s「…………どうも！」

一夏「……………」

グラ「……………」

千冬「遅いぞ！織斑、グラハム。」

一夏「でも、千冬姉ちょっとトラブルがあって」ガスッ

千冬「言い訳をするな、それと先生だ。いい加減に学習しろ。」

一夏「ッ、はい、すいません。先生」

グラ「千冬女史、私も油断していた。以後気をつける。」

千冬「はあ、なんでお前は上から目線なんだ。それと先生だ。」ガ  
スッ

グラ「ぐッ、失礼した。千冬、先生。」

千冬「まあ、いいだろう二人とも列に入れ。」

千冬「では、いまからISの装着と起動を練習機を用いて行う。各  
人速やかに行うように。」

千冬「では、山田先生後はよろしくお願いします。」

真耶「はい、わかりました。皆さん！今から詳しい説明をしますの  
でよく聞いて置いてくださいねー。」

千冬「おい、グラハム。こっちへ来い。」

グラ「？何か用か。千冬<sup>ガスッ</sup>女先生。」

千冬「お前は、経緯が経緯だからISを起動はしたもののまだ装着  
したことがないだろう。特別に指導してやるついて来い。」テクテク

――――

斬り捨て御免!!!

グラ（また、この格納庫か。あらためて見ると、想像以上に大きなISは。）

千冬「背中を預ける、そうだ、それだけでいい。あとほぼ大丈夫だと思うが肉を挟んだりしないように注意しろ。」

千冬「他は、すべてシステムが最適化してくれる。どうだ、簡単だろう?」

スウ、カチャ、キシ、カシン! ” A c c e s s ! ”

グラ「!?!?・・・これは、見える私にも敵が見え（ry」

千冬「それは、ハイパーセンサーだ。その名の通り高性能のセンサーで、搭乗者の知覚領域を拡張する。360度全て認識することが可能だ。」

グラ「漢字か。・・・だ・・・てっ?」

千冬「打鉄だ。<sup>うちがね</sup>日本の純国産第二世代ISだ。安定した性能を誇り使いやすい、初心者のお前には丁度いいだろう。」

グラ「この漆黒の装甲カラーに、武者鎧を模したフォルム。スサノオを思い出すな、良い！」

グラ「ところで、第二世代とは？」

千冬「ISの開発段階だ。第一世代が兵器としてのISの完成を目指した機体で、現在はほぼ退役している。」

千冬「その第二世代は後付武装によって、戦闘における用途の多様化に主眼が置かれた世代だ。現在最も多く実戦配備されている。」

千冬「そして今は第三世代の開発が各国で行われている。第三世代は操縦者のイメージ・インターフェイスを用いた特殊兵器の搭載を目標とした世代だが、未だ実験機の域を出ない。」

千冬「装着は出来たようだな。・・・説明するのも面倒だ、まずは身体で基本的な感覚は掴んで貰う。習うより慣れるだ。行け！」

グラ「ああ、もとより私はこんなものを装着して大人しく説明を聞いていられるほど我慢強い人間ではない。そうさせてもらう。」

ガシューイ、ガシューイ・・・ガチッ

グラ「グラハム・エーカー、出る！」バシューム！！

-----

ガウン、シューウン、キューイイイイ！

グラ（すごいな、このISとやらは。このサイズでMSとなんら遜色がない、まさに圧倒的性能だ。）

グラ（しかし、MSの操縦とはだいぶ毛色が違うな。より五感的、直感的に操作することが出来るが・・・）

グラ（MSの操縦よりもさらにイメージ的な、感覚的な慣れが必要になる。私は対応できるのか・・・いや、そうする必要があるか。）

千冬くグラハム、聞こえるか？>



グラ「ああ。聞こえる。」

千冬くISはどうだ？初めて操縦した感想は？>

グラ「すばらしいの一言に尽きる。この存在に心奪われそうだ。」

千冬くそうか、それは何よりだ。これから、ダミィバルーンを射出する。全て両断しろ。>

グラ「了解した。グラハム・エーカー参る！」

キュイイイイイ！

グラ（ブシドーモード）「切捨て御免！！！」ズアッ！！

少女、その名はセシリア

-----

グラ（ふう、ESについては知らないことばかりだな。授業についていだけで精一杯だ。）

グラ（何より、漢字が苦手なのは痛い。早急に対処しなくては・・・）

セシリア「ちょっとお時間よろしくて？」

グラ「む、私に用か？なんだ？」

セシ「まあ！何ですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるのではないかしら？」

グラ「失礼した。で、君は何者だ？私に何か用か？」

セシ「だから、その態度はなんですの！」

グラ「失礼したと言っている！君は誰だ？私の記憶にはないが・・・」

セシ「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

グラ「すまない、1つ聞いていいか？」

セシ「ふん。下々のものの要求に答えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ。」

グラ「代表候補生とは何だ？」

セシ「あ、あ、あ・・・」

グラ「『あ』？」

セシ「あなたもですか！？本気でおっしゃってます？」

グラ「ああ、私の記憶にはない。」

セシ「信じられない、信じられませんわ。織斑　一夏といい、男とは常識が欠落している生き物ですよ？テレビとか見たことないのかしら……」

グラ「で、代表候補生とは？」

セシ「字面の通り国家代表IS操縦者の、その候補生として選出されるエリートのことですわ。……1日に同じセリフを2回も言うことになるなんて。」

グラ「なるほど、理解した。ところで、さっきの『あなたも』とはなんだ？」

セシ「さっき織斑　一夏にも同じ質問をされたのですわ。」

セシ「……思い出したら怒りが沸々と湧いてきましたわ。わたくしと同じく教官を倒したですって！？あんなぼんやりした男が、信じられませんわ。」

グラ「セシリアは代表候補生なのだよな？」

セシ「ハッ！？そ、そう！エリートなのですわ！」

セシ「本来ならエリートたるわたくしの様な人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡・・・幸運なのよ。その現実をもう少し理解して頂ける？」

グラ「なるほど、なんという僥倖！」

セシ「・・・馬鹿にしていますの？」

グラ「失礼。」

セシ「あなたもISについてろくに知らないのに、よくこの学園に入れましたわね。数少ない男のIS操縦者と聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど・・・二人とも期待はずれでしたわね。」

グラ「・・・」

セシ「ふん。まあでも？わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ。」

セシ「ISについてわからないことがあれば、まあ・・・泣いて頼

まれたら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから。」

グラ「セシリアが優秀なのはよく分かった。だが、干渉・手助け、一切無用！・・・と男のPr」

セシ「なんですって！？わたくしがせっかく手を差し伸べてあげましたのにその返事は何ですか？」

グラ「待て、私が言える立場ではないが人の話は最後まで聞け！」  
ガラッ

千冬「全員、すぐに席に着け授業を始めるぞ」

セシ「・・・この返事高くつくことを忘れないことですね」スタスタ

グラ「待て！」

千冬「座れと言ったはずだ」ガスッ

グラ（くっ、「・・・と男のプライドでは言いたいところだが、ど

うしようもなくなったら頼らせてもらう。ありがとう」と上手く纏めるつもりだったのだがな）

グラ（下手に格好をつけると要らぬ誤解を招くか・・・、私の悪癖の一つだな）

グラ（分かり合うというのは難しい。少年、君ならどうする？）

グラ（少年、・・・君は対話できたのか？世界と分かり合えたのか？）

千冬「授業中に別の世界にトリップするな。あと分かり合えないのはお前のせいだ」ガスッ

一夏（千冬姉殴りすぎ）ガクブル

千冬「何か言ったか？織斑」

一夏「いえ、何もありません。サー！」

千冬「普通に答える馬鹿者」ガスッ

一夏(うう・・・クソ、結局殴られた)

千冬「さて、この時間は実践で使う各種装備の特性についての説明と再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める」

千冬「まずは、代表者から決める。自薦他薦は問わない、だが責任は負ってもらう。推す者もされる者もそれなりの覚悟を持てよ」

バツ

女子1「はい、織斑君が良いと思います！」

女子2「私もそれが良いと思います」

一夏「え？お、俺！？」ガタ

女子3「私はグラハム君が良いと思います！」

女子4「私も、私も！」



グラ「なに！？」ガタ

千冬「2人とも席に着け、邪魔だ。あと推薦された者に拒否権はない、覚悟を持てといったはずだ」

千冬「さて、他にはいないか？いないのならこの2人の内で決定する」

セシ「待つてください！納得がいきませんわ！」

セシ「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！」

セシ「わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を味わえとおっしゃるのですか！？」

グラ（男なんて、か。女尊男卑の社会だとは聞いているが妙な感覚だな）

一夏（そうだ、そうだ……て、ん？）

セシ「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それ

を物珍しいからといって極東の猿や可笑しなピエロにされては困ります！」

セシ「わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

一夏（人じゃなくなってる！？ていうかイギリスも島国だろ。そんな言うほど日本と差なんかないだろ）

グラ（道化か……。確かに昔の私はまさに其れだったが、こうもズバリと言われるといい気分はしないな）

セシ「いいですか！？クラス代表は実力トップになるべき、そしてそれはわたくしですわ」

一夏（代表にはなりたくないけど、こうまで言われるとやっぱり癪だな）

セシ「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛でー」

一夏「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

セシ「なっ・・・!?!」

セシ「あつ、あつ、貴方!わたくしの祖国を侮辱しますの!?!」

一夏「お前だつて日本を侮辱したろ、自分がされて嫌なことは他人にはするなつて教わらなかったのか?」

セシ「ぐっ、・・・いいですわ、いい度胸ですわね。決闘ですわ!」

一夏「おう、いいぜ。四の五の言うより分かりやすい」

セシ「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使いーいえ、奴隷にしますわよ」

一夏「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

グラ（・・・なにやら、物騒なことになってきたな。皆血気盛んだ、嫌いではない。だが、私はどうするか）

グラ（決闘とやらに興味はあるが、意地の張り合いにまざるのは大

人気ないか・・・)

セシ「そう？何にせよちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットと」

セシ「わたくしの専用機、祖国イギリスが生み出した第三世代IS『ブルー・ティアーズ』の実力を知らしめるまたとない機会ですね！」

グラ（！？第三世代、最新鋭機か・・・第二世代あの性能だった。とすれば、第三世代ともなればその性能は凄まじいのだろうか？）

グラ（考えるだけで心躍る！ふっ、私も大概だな。だがそれが私だ、仕方がない。ぜひとも合間見え、刃を交えなくてはな！くっ、大人気ないなど言っていられない）ガタッ

グラ「その話、少し待ってもらおう！私も参加しよう」

セシ「なっ！？貴方までですか？いい、良いですわ。ならこの勝負に勝ったものがクラス代表になる、それでよろしいですわね？」

一夏「ああ、別にいいぜ」

グラ「私はそれで構わない」(クラス代表には興味はないが、丁度いい大義名分だな)

千冬「勝手に話を進めるなと言いたいところだが、まあいい。話は纏まったな。では、勝負は一週間後の月曜、放課後に第三アリーナで行う。」

千冬「試合の形式は3人での総当り戦を行う。そして一番勝率の高いものをクラス代表とする、いいな？」

グ・ー・セ「はい」

千冬「よし、各人準備を怠らぬように！では、各種装備の特性について説明する。席に着け」

## インフィニット・ストラトス

―夏「う、ううう……」

グラ「む、ぐつ、ぬう……」

―夏「なあ、グラハム分かるか？」

グラ「恥ずかしながら私にはさっぱりだ」

―夏「だよな。俺もだよ、意味がわからん……。なんでこんなにややこしいんだ？」

グラ（こんなときに、カタギリがいてくれれば助かるのだがな。……ないもの強請りしてもしょうがないか）

カツ、カツ

千冬「2人とも、まだ教室に居たか。ちょうどいい」

一夏「千冬姉！」

千冬「先・・・、まあ良いか、既に放課後なものな。二人に話がある、よく聞け」

千冬「一夏、お前のISだが準備まで時間がかかる」

一夏「へ？」

千冬「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するぞうだ」

一夏「???」

千冬「はあ、なにキョトンとした顔をしている。教科書6ページ、音読してみろ」

一夏「え、えーと何々『現在、幅広く国家・企業に情報提供が行われているISですが、その中心たるコアを作る技術は一切開示されていません。現在世界中にあるIS467機、その全てのコアは篠ノ之博士が作成したもので、これらは完全なブラックボックスと化

しており、未だ博士以外はコアを作れない状況にあります。しかし博士はコアを一定数以上作ることを拒絶しており、各国家・企業・組織・機関では、それぞれ割り振られたコアを使用して研究・開発・訓練を行っています。またコアを取引することはアラスカ条約第七項に抵触し、あらゆる状況下で禁止されています』か・・・」

千冬「つまり、そういうことだ。ISは数に限りがある、本来ならIS専用機は国家あるいは企業に所属する限られた人間にしか与えられない。が、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることとなった。理解できたか？」

一夏「な、なんとなく」

千冬「そしてこれは、グラハム、お前にも当てはまる。お前にも一夏同様に専用機が与えられることになった」

千冬「ただ、お前も事情が事情だ。新しくISを開発することができない、ので学園が所有している打鉄を改修して専用機とする」

グラ「了解した。貴重なIS、託されたからには結果は出す」

千冬「ふっ、良い心意気だな。精進しろよ」



一夏「なあ、事情ってなんだ？」

グラ「！」

千冬「！あ、ああ。グラハムはお前よりも急な入学だったからな、手続きや何やらで忙しいんだ」

一夏「へへ、大変だな」（なんか、変だな・・・、気のせいかな）

グラ「そ、そういえば、私も授業のときから気になっていたことがあったのだが」

千冬「なんだ？」

グラ「一夏の幼馴染だという、篠ノ之 箒。彼女はIS開発者の篠ノ之博士と関係があるのか？苗字が同じだか」

一夏「ああ、箒は、束さん・・・篠ノ之博士の妹だよ」

グラ「ふむ、では『コアを一定数以上作ることを拒絶しており』とあるが、こんな極めて重要な発明、無理やり作られるか情報開示させられるものではないのか？各国の軍や機関が大人しく割り当て

られたものだけを使うとは思えないが」

一夏「束さんはいま行方不明中、手配中だよ」

グラ「・・・壮絶だな」

千冬「・・・この話はここまでだ。他人のプライベートに首をつっこむべきじゃない」

千冬「さて、グラハム、お前の書類に関しても少し話がある付いて来い。一夏、お前は戻っている」

――

最高のスピードと、最強の剣を所望する

-----

グラ「で、書類に関する話とはなんだ？」

千冬「ん？ああ、それは嘘だ。一夏が詮索してくると面倒だったからな」

グラ「では、一体何の話が？」

千冬「さっきも話したが、お前には打鉄を改修したものが専用機として割り当てられる」

千冬「そしてその改修をどのようなプランで行うかは、まだ決まっていない。この間のお前の話を信じた訳じゃないが、全てが嘘だったとは思えない」

千冬「ただの、齢15・6の少年ではないことは私も感じ取っている。そこで、改修の方向性の希望を聞いてやろうと思ってな」

グラ「少年と呼ぶのは止めてもらいたい。それは、ありがたいが・

・良いのか？一夏にも聞かなくて」

千冬「ああ、あいつは氣勢だけがいいが中身はただの素人だ。まだ、その段階には程遠い」

グラ「ずいぶん辛辣だな」

千冬「本当のことを言っているだけだ。まあ、それでも良い気分はしないだろうからな。先に帰らせた」

グラ「なんと！？そのような細やかな心づかいも出来たのか、驚きだ」

千冬「一言多い！思ったとしても口にだすな、・・・そもそも思っ  
な！」ガンッ

グラ「すまない」

千冬「それに、さっきから聞いていたら遠慮もないな。年上にはもう少し敬意を示せ。まあ、今は放課後、オフだから許すが」

グラ（いかな、そうだ今は30代ではないのだった。年下と話し

ている気分だった、注意しなくては)

千冬「オンのときはこうはいかんから、注意しろよ。まあ、殴られたいなら話は別だが」

グラ「私にそっちの趣味はない！わかった、注意する」

千冬「ふう。さて、くだらない話はここまでにしておいて本題に入るぞ。改修の方向性について希望はあるか？あるなら言え」

グラ「うむ、・・・そうだな。機動性と運動性を極限まで高めてもらいたい、そのためなら装甲値や装備を犠牲にしても構わない」

千冬「それでは搭乗者への負担も増すが・・・、どうする？」

グラ「無視して頂いて結構！」

千冬「ふっ、良い度胸だ。わかった、その方向で改修を進めることにする。だが、後で音を上げてベソをかいても知らんぞ？」

グラ「望むところだ」と言わせてもらおう。」

千冬「なら、来週の試合楽しみにさせてもらおうね」



グラハムガンダム、略してGガン

-----

第「はあ！ふッ、ぬ・・・メエエーン！！」スパアーン

ドサッ

一夏「ぐっ、だ、痛う・・・」

第「・・・どういことだ」

一夏「？いや、どういことって言われても・・・」

第「どうしてここまで弱くなっている！？」

一夏「受験勉強してたから、かな？」

第「・・・中学では何部に所属していた？」

一夏「帰宅部。3年連続皆勤賞だ」

一夏（実際は家計のためにバイトしてたんだけど、言わぬが花だな）

第「……なおす」

一夏「へ？」

第「鍛え直す！IS以前の問題だ！これから毎日、放課後3時間、私が稽古をつけてやる！」

一夏「それ、ちょっと長くないか？というかISのことをだな」

第「だから、それ以前の問題だ！」

第「情けない。ISを使うならまだしも、剣道で男が女に負けるなど・・・悔しくないのか、一夏！」

一夏「そりゃ、悔しいさ。こんなんじゃ、勝つことも守ることもできない」



箒「だったらなおのこと、特訓だろう！」

一夏「・・・ああ、わかったよ。俺も今の自分は許せない。箒、俺を一から鍛え上げてくれ」

箒「う、うむ。そういうなら、わ、私が直々に稽古をつけてやる。か、感謝しろよ／＼」

一夏「ああ、こんなこと頼めるの箒だけだしな、感謝してもしきれないよ。でも、ほんとに強くなったよなあ」

一夏「綺麗にもなったしー」

箒（きつ、綺麗！？そ、そういうことをさりりというんじゃない、一夏／＼でも・・・そうか、綺麗か。・・・ふふつ、綺麗 綺麗）

一夏「ー剣道も昔は俺の圧勝だったのにな。努力したんだよな、尊敬するよ」

箒「う！？うう、いや、それは・・・」

一夏「箒？どうかしたか？」

箒「と、ところで、あれはどういうことだ？」

一夏「あれ？」

グラ「はッ、せい！」ブンッ、ブンッ

グラ「うむ、やはり木刀のこの握り心地、防具の匂い。「きわみ極」を  
指し修行したあのころを思い出す！」

一夏「ああ、グラハムのことか。俺が誘ったんだよ」

箒「二人でISの練習をすると朝言っていたはずじゃなかったか？」

一夏「そのつもりだったけど、グラハムもISについては分からな  
いことが多いみたいだしさ。困ったときは助け合わないと！」

箒（くッ！せっかく二人つきりで特訓をするはずだったのに。・・・  
一夏のアホ）

第「でも、ー」

グラ「すまない、私が居ては迷惑だったか？誘われるまま、はいほいついて来てしまった・・・私は空気が読めない」

第「い、いや・・・別にそういうわけじゃ・・・気にしないでくれ」

グラ「そうか、ならば気にしない。ところでさっきの試合、相当の手練とお見受けした。一つお手合わせをお願いしたい！」

第「別にいいが、経験はあるのか？」

グラ「『武士道とは死ぬことと見つけたり』・・・もちろんだと言わせて貰おう！かつて私はミスターブシドーと呼ばれた男だ。本意ではなかったがな」

一夏（うわ、可笑しな漢字のＴシャツを着た外国人と同じ匂いがする！？）

第「『葉隠』か！・・・それに『ミスターブシドー』、良い！」

一夏「ちょ！？・・・え？第さん？」

箒（ブシドースイッチON）「・・・そちらも、相当の手練とお見受けした！お相手いたす！」

一夏「え？なにその口調！？」

ブシドー「うむ、ならば・・・」

一夏「ねえ、おい・・・って、え？何この空気」

ブシドー「いざー！」

箒「ー尋常にー！」

ブシ・箒「勝負！！」「ダッツ！

ブシ「ぐっ！引導をわたす、箒！！」「ズバァン

箒「くう、舐めるな！今日の私は阿修羅すら凌駕しているぞー！！」「バシィー！」

ブシ「それは私のセリフだ！」バァン、ギリギリ

箒<sup>フ</sup>「気にするな、女々しいぞ！」ギリギリ

バツ

ブシ「言ってくれるな。次の一撃で決める！」スウツ

箒<sup>フ</sup>「ならば、こちらも！！」ググツ

ブシ「斬り！」

箒<sup>フ</sup>「捨て！」

ブシ・箒「御免！！！！」「ズアッ！

ブシ・箒「うおおおおおおおおお！！！！」

一夏「……箒、戻ってきて……」

-----

私はフラッグファイターだ!!

-----

一夏「……なあ、2人とも」

第「なんだ、一夏？」

グラ「どうしたというのだ、神妙な顔をして？」

一夏「今日は何曜日だ？」

第「？月曜日に決まっておろう」

一夏「そうだな、月曜日だ。で、月曜日は何があつたかな？」

グラ「なんだ、忘れてしまったのか？クラス代表を決めるための決闘の日だろう。ふつ、昨日は興奮のあまり私は寝付けなかった！」

一夏「そう、決闘の日だ。俺達は、この日の為に先週から特訓してきたんだよな？」

第「ああ、その通りだ。頑張れよ、一夏！」

一夏「ありがとう。けど、気のせいかもしれないんだが」

第「そうか。気のせいだろう」

一夏「……ISのことを教えてくれる話はどうなったんだ？」

第「……」

グラ「……」

一夏「目・を・そ・ら・す・な！」

第「し、仕方ないだろう。お前とグラハム、両方ISがなかったのだから」

グラ「う、うむ。それでは、致し方がないというものだ」



一夏「致し方なくない！知識とか基本的なこととか、あつただろ！」

一夏「それなのに、お前達は来る日も来る日も人間離れた戦いを繰り返して！」

一夏「それに巻き込まれる俺が、何回死を覚悟したと思ってるんだ！」

第・グラ「……………」

一夏「目をそらすな」

一夏「……はあ、でも過ぎたことはしょうがないか。今はこれらのことだけ考えようか」

第「そ、そうだな。それがいい！」

グラ「その旨をよしとする！」

一夏「て言っても、まだ俺とグラハム両方ともISが届いてないんだけだな」

第「……………」

グラ「……………」

一夏「……………」

真耶「みなさん、みなさん、みなさん！」バタバタバタッ

一夏「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」

真耶「は、はいつ。すゝはゝ、すゝはゝ」

一夏「はい、そこで止めて」

真耶「うっ」

真耶「……………」

真耶「…………ぷはあっ！ま、まだですかあ？」

一夏（やばい、萌える）

千冬「目上の人間には敬意を払え」ズパンッ

一夏「千冬姉・・・」ズパンッ

千冬「織斑先生と呼べ。学習しろ、さもなければ死ね」

一夏「うう・・・」

真耶「そ、それですね！来ました！ Graham 君の専用 IS！」

Graham「なんと！？」

千冬「Graham、すぐに準備をしろ。織斑の IS はまだ準備に時間がかかる、お前から先に試合を行う」

千冬「ぶつつけ本番になるが、ものにしろ。なあに、この程度の障害なんでもないだろ？」

グラ「・・・ああ、『望むところだ』と言わせてもらおう。！」

千冬「頼もしいな。織斑、お前は寮に戻っている。お前の番がきたら呼びに行く、それまで待機している」

一夏「え、ここでグラハムの応援ー」

箒「馬鹿、公平を規すために行くぞ」グイッ

一夏「おわッ、引ッ張るな、箒。グラハム、頑張れよ！」ズル、ズル

グラ「ああ、もちろんだとも！」

千冬「話は済んだな。これがお前のISだ」ピッ

ゴウン、ゴウン、ゴウン、プシュー！

グラ（！？・・・この洗練されたフォルム、漆黒のボディ、大小二対の羽！まさにこれは・・・）

千冬「どうだ？もとが打鉄とは分らない程に改修されているだろ

う。お前の希望通りに機動性、運動性のみを極限まで高めた機体だ。武装は試作型リニアライフルとプラズマブレイドが2本だけだ」

千冬「問題は、名前だが。・・・無難に打鉄二式とk」

グラ「・・・フラッグだ」

千冬「何？」

グラ「この機体はユニオンフラッグカスタムだ。そして私は、フラッグファイターだ!!」

千冬「何を興奮しているのか知らんが、わかった。この機体はユニ・・・長いな。カスタムフラッグと命名する」

千冬「名前も決まった。体を動かせ、すぐに装着しろ。時間がない」

グラ「了解」スウ、カチャ、キシ”Access”

グラ（・・・ハワード、ダリル。私は最高の幸せものだ。・・・また私の刃となってくれるかフラッグ!）

千冬「装着できたな。相手は代表候補生だ、経験がちがう。気をつけるよ」

グラ「どれほどの経験差であろうと……！今日の私は、フラッグのためにも負けられない」

千冬「そうか、ならば行け。行つて勝利を掴み取れ！」

グラ「ああ。・・・グラハム・エーカー」ガシュウ、ガシュウ、ガチッ！

グラ「カスタムフラッグ出るぞ！！」バシユウ！

――

## V S セシリア

セシ「まず、逃げずに来たことは褒めて差し上げますわ」

グラ「男の誓いに訂正は無い。敵前逃亡などありえないだろう」

セシ「そう。・・・最後のチャンスをあげますわ」

グラ「なんだと？」

セシ「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、惨めな姿を公衆に晒したくなければ、今ここで謝るというなら、許してあげないこともなくってよ」

グラ（と、言いつつ射撃体勢に移行か・・・。なかなかに抜け目がないな、セシリア・オルコットとやら）

グラ「舐められたものだな。君が何を思おうとも構わん。だがその汚名、今ここで晴らして見せよう」

セシ「そうです。残念ですわ、それならー」ガシューッ

セシ「・・・お別れですわね！」ガチ

・・・ビシュウウム！

グラ「ぐっ！？」

グラ（速い！しかもビーム兵器だと？あの大きさで！やはり、IS、圧倒的性能だ。場合によってはMS以上か）

グラ「よくも…私のフラッグを！！」

グラ（・・・だが二度目はない、行く！）ギューッ！

セシ「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブル  
ー・ティアーズの奏でる円舞曲で！」ビシュウ、ビシュウ、ビシュ  
ウ！

ギューッ



ギュシユン

バシユウウ！

グラ（確かに、正確な射撃だ。さすがは代表候補生、国を背負うだけはあるー！）

グラ（ー！だが、移動予測が甘すぎる！幾らISに不慣れでも、これでは私を落とせはしない。．．．いつかのアザディスタンでの緑のガンダムに比べれば！）

セシ「くっ、速い！？．．．ちょこまかと鬱陶しい方ですわね！」  
ビシユウ、ビシユウ！

グラ「連射性能には難有りだな、IS。呼吸が乱れた！そこっ！」  
ガドンッ、ガドン！

セシ「きゃー！ぐう．．．ッ」

グラ（．．．くッ、やはりこっちのリニアライフルも連射はきかなか）

グラ（仕方がない、懷に飛び込む！）ギュシュウウ！

グラ「・・・くッ、プラズマブレイド！」ガチンッ

グラ（・・・やはり初めてでは口に出さないと呼びだせないか）

セシ「近づけさせませんわ！」バシュウウ！

ギュギュッ！

グラ「当りはしないさ。破片の一つでも頂く、セシリア！」

ーーーーグアッ！！

セシ「そ、そんな！・・・・・・なんて言っと思ひまして？」

セシ「掛かりましたわ、ブルー・ティアーズ！」ビュ、ビュ、ビュ  
イ！

グラ「なに！？・・・ぐうッ！」

グラ（意識外からの攻撃！？これはフアング？いや・・・ビット兵器か！こんなものまで実現させるとは。IS、なんて性能だ！）

セシ「そのまま、墜ちてしまいなさい！」ビシュウウム！

グラ（まずい！、被弾の硬直で回避できない。墜ちる！？）

――

## V S セシリア、決着

――ドオオンッ！！

セシ（ふう・・・やりましたわね。手応えもありましたし、なににより爆炎も・・・）

セシ（・・・ん、爆炎？わたくしはミサイルを撃った覚えはありませんわ。ISには絶対防御とシールドがある、爆発なんてどこから？）

セシ「！？まさか！」

――ギューイン！

グラ「ふッ、そのまさかだ！セシリア！」

グラ「この程度で私を落とせると思うとは、笑止千万！」

セシ「・・・あの状況を凌いだことは褒めてあげますわ、けど」

セシ「わたくしのブルー・ティアーズから逃れることはできませんわ！」ビシュウツ、ビシュウツ！

グラ（ちいッ、ライフルを盾にしなければならそのまま墜ちていたな。粹がってみせたが、貴重なライフルとシールドエネルギーの9割を損失してしまった。もう後はない！）ギューイン！

グラ（何かないのか？切り札は。このままでは、いつかやられる！・・・挽回の一手をー）

”ーフォーマットとフィッティングが完了しました。高機動形態使用可能です”

グラ（ーなんと！？高機動形態だと？）

千冬<<ーああ、言い忘れていたがな、人型では機動力に限界がある。ので、そのISでは形態を変形することによりその限界を突破するようになってる。だが、決s>>

グラ「・・・フハハハ！そうではなくてはな、IS！変形までこなすとは、やはりフラッグの名を冠するにふさわしい！」

千冬「くおい！人の話を最後まで・・・。無駄か、この状態で何を言っても。はあ・・・>>

グラ「やはり私は・・・運命の赤い糸で結ばれていたようだ、このフラッグと！」ガコツ、ガチン！

セシ「な！？変形しましたの？・・・けど、それがどうしたっていいますの！」ビシュウ、ビシュン！

グラ「先程の借り、返させてもうぞ、IS！・・・この真に私色に染まったフラッグで！」ギュシュウウウウウウ！

セシ「！？速い、速すぎますわ！このわたくしが動きについていけない！？」

セシ「ですが、好きにはさせませんわ！もう出し惜しみはしません。『ブルー・ティアーズ』！」ビュ、ビュ、ビュ、ビュ、ビュ！

グラ（ぐうツ！確かに凄まじいGだが・・・MSのそれに比べたら！やはり優秀だな、IS）

グラ（ビット兵器とは厄介だ。もう当たるわけにはいかないというのに）ギョルン、ギョイツ！

グラ（・・・だが、何故主砲を撃たない？いや、撃てないのか？・・・ビットとの併用には至っていないとすれば、勝機はある！）

グラ「活目させてもらおう、IS。私を落とせるか、それとも落とされるか！」ギョイイイイ！

セシ（くツ、なんで当たりませんの！相手のエネルギーはあと少しのほず、当たれば一発ですのに）

セシ（やっぱり、早く『スターライトmkII』と『ブルー・テアーズ』の併用ができるようにならないといけませんわね）

グラ「どうした、身持ちが堅いな、IS！接近する」ギョイイイイイ！

セシ「近づけさせませんわ！」ビシュウツ！ビシュウツ！

グラ（ビットの射撃が止んだ。やはり！）ギユ、ギユウ！

――ガゴン、ガチッ！

セシ「な！？また変形しましたの？しかもこんな高速で移動中に！」

グラ（・・・ッう、がは、はぁ。この程度のGで根を上げるものか！）

グラ「人呼んで、グラハムスペシャル！！抱きしめたいなあ、IS  
！」グアッ！

セシ「ッ、イ、インターセプター！」バジィッ！

セシ「わたくしに剣を使わせるだなんて。なんなんですか？あなた  
！」

グラ「あえて言わせて貰おう、グラハム・エーカーであると！」



グラ「たった今、君の性能に心奪われた存在だ。ガンダムと同じく、この気持ち、まさしく愛だ！」

セシ「な！？／＼あ、愛？・・・あ、あなた、何をおっしゃてますの！『ブルー・ティアーズ』！」ビュ、ビュイ！

グラ「フラれたな。だが多少強引にでも抱きしめさせてもらっ、ISS！」ギユイイ！

グラ「引導を渡すッ！ISS！」グアッア！！

セシ（そんな！？や、やられる！）

ーーーーバジイツイイン！

セシ「ぐっうッ！」

グラ「うおおおおお！」

『ーーーーブウウウ！試合終了。両者引き分け』

セシ「・・・え？」

グラ「な、なに!？」

――――

最後、試合に勝利したかにみえたが・・・私もまだまだ未熟だったようだ。後に千冬女史から聞いた話だと、私がセシリアを貫くのと同時にビット、『ブルー・ティアーズ』の一機が私を撃ち抜いていたようだ。威力が低いものだったようで、あの時の血の上った私では被弾に気付けない程度の衝撃しかなかったが・・・、エネルギーをほぼ使い切っていたフラッグには決定打となってしまった。

セシリアも意外な顔をしていたことから、無意識の内に撃っていたらしい。その戦闘センス、さすが代表候補生だということを最後に思い知らされた形となった。

さて後に行われた一夏とセシリアの戦いだが、勝者はセシリアらしい。私は見ることは出来なかった。後に行われるはずだった一夏との戦いで公平を規すためといのものもあるが、なにより私は大怪我を負っていた。途中でのグラハム・スペシャルがいけなかったらしい、肋骨数本にひびが入っていた。千冬女史には「私の話を最後まで聞かないからだ、馬鹿者」と呆れられてしまったな。おかげで、一夏との試合はなくなってしまった。一夏の専用ISとやらにも興味以

上のものがあつたので、口惜しさは残るが、私とて人の子だ。怪我をしていてはどうしようもない。なに、次の機会を楽しみにさせてもらつた。

――

## V S セシリア、決着（後書き）

はい、グラハム無双すぎますよね。・・・すみません。

ただ、グラハムは勝手に動いちゃうんですよ。だから仕方ない！（おい

戦闘シーンは作者の技量では何かなにやら分らないと思います。擬音のオンパレードだし。のでISのアニメでのV S セシリアと0のV S デュナメスを見ることをお勧めします。

ここまでお付き合いいただいてありがとうございます。では次回でお会いしましょう、ノシ

## 理想の男性

――サアアアア・・・。

セシ（今日の試合――）

セシ（結果的には引き分け。負けてはいないのに・・・）

セシ（奇襲以外、手も足も出なかった。自分の実力の無さを、まざまざと見せ付けられましたわね）

セシ（・・・グラハム・エーカー）

父は、母の顔色ばかり窺う人だった・・・。そんな父が嫌いだった。父のような情けない男とは将来結婚しない、物心ついたころからそう考えるようになっていた。

母もそんな父を疎んでいるきらいがあった。母は強い人だった、強く、厳しく、そして憧れの人だった・・・。

そんな母も、父も今はいない。陰謀論もあつたが状況があつさりとそれを否定した。両親は100人規模の鉄道事故により、他界した。後に残つたのは莫大な遺産とそれに群がろうとする大人だけだ。そんな大人達から家を守るために、あらゆる勉強をし、その過程でISの才能が認められ代表候補生となった。

強くなくてはならない。そうでなくては、家は守れない。

・・・けど、自分は強くあれているのかと、時々、とても不安になる。そんな時、自分のそばに居てくれる人がいればと考えてしまう。強い瞳、意思を持った理想の男性を・・・。

セシ「グラハム、エーカー・・・」

彼は、とても強い瞳をしていた。誰に媚びるでもない、己の意思で未来を切開く、そんな強さを秘めた瞳だった。

セシ（・・・なんなんですか？この気持ちは）

彼のことを考えると不思議と胸が熱くなる。今までに経験したことのない感情の奔流。

セシ（――知りたい、彼のことを）

セシ（――知りたい、その強い瞳の奥底を）

・・・出会ってしまった、理想の男性と。そう、グラハム・エーカ  
ーその人と。

## 決定、クラス代表

真耶 「では、一年一組代表は織斑 一夏くんに決定です。あ、一繋がりでいい感じですね！」

第 「やったな！頑張れよ、一夏！」

一夏 「ああ、一応ありがとうございます。・・・先生、質問です」

真耶 「はい、織斑くん」

一夏 「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になつてるんでしょうか？」

真耶 「それはー」ガタンッ

セシ 「それはわたくしが辞退したからですわ！」

セシ 「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えて



みれば当然のこと。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですから。それは仕方のないことですわ」

セシ「むしろ、初見でわたくしにあそこまで喰らいついたことは賞賛に値しますわ。それで、まあ、わたくしも大人げなく怒ったことを反省しまして」

セシ「クラス代表を譲ることにしましたわ。やはりIS操縦には実戦がなによりの糧。クラス代表ともなれば戦いに事欠きませんもの、早くわたくしに追いついてくれることを期待してますわ」

女子1「いやあ、セシリアわかってるね！」

女子2「そうだよね。せっかく世界でたった二人の男のIS操縦者がいるんだから、同じクラスになった以上持ち上げないとね！」

女子3「私たちは貴重な経験を積める、他のクラスの子には情報が売れる。一粒で二度おいしいね、1組は！」

一夏（おい、人を出汁に勝手に商売するなよ・・・）

一夏「だったら、グラハムは？引き分けだったんだし、そっちのほうに適任じゃー」

千冬 「グラハムは負傷している。そんな大した怪我じゃないが、クラス代表としてISで試合を行う以上万全の体調でないと危険だ」

千冬 「ISは唯でさえ強力な代物だ。また、クラス対抗戦ともなれば否応なく過熱した試合となり、危険度はさらに増す」

グラ （・・・くツ、せっかくクラス代表になれば未だ見ぬISとの熱き戦いが待っていたというのに。これも私が乙女座であるが故か）

千冬 「以上の点からグラハムは選出不可だ。あと、グラハム、勝手に責任を変なものに押し付けるな」

千冬 「怪我をしたのは、私の説明を聞かないで移動変形をおこなった自分の責任だ。反省しろ」

グラ 「・・・すまない」

千冬 「ふう。・・・よって、いままでのことからクラス代表は織斑 一夏とする。依存はないな？」

一夏 「はい」（正直、嫌だけどこの状況じゃ仕方がないか。それに皆が選んでくれたんだし・・・）

千冬 「よし、ならば決定だ。織斑、やるからにはクラスの期待に答えられるように精進しろよ」

一夏 「ああ、もちろんだ、千冬姉！やるからには全力でいく」

千冬 「ふッ、返事だけは頼もしいな。・・・だが、敬語を使え。そして先生だ」ガンッ

千冬 「まったく、色々な意味で期待を裏切らん奴だな。馬鹿者」

一夏 「うう・・・」

e n d

p a r t 1

## 転校生はセカンド幼馴染

part 2 「転校生はセカンド幼馴染」

千冬 「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらう。  
織斑、グラハム、オルコット。試しに飛んでみせろ」

千冬 「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで1秒と掛からないぞ」

グラ （ISの展開……。人の二倍以上の大きさのISがこんな小さく、軽くなるとは。質量保存等の物理法則は完全に無視だな）

グラ （まったく、もとの世界の科学力で見ても……。本当にとんでもない代物だな、ISは）

グラ （……。一夏の待機形態はガントレットか、セシリアは左耳のイヤークラス）

グラ （そして私のはー）

ーVSセシリア戦直後、格納庫にて

真耶 「グラハム君、惜しかったですね。でも、初めてで代表候補生に引き分けるなんて凄いですよ！」

グラ 「ありがとう。だが、勝利することができなかった・・・もし此処が戦場なら私は死んでいた」

千冬 「まあ、そう落ち込むな。確かに動きに光るものはあったぞ。ただ、まだまだ全てにおいて熟練が足りないだけだ」

千冬 「それはそうと、身体は大丈夫なのか？高速移動での変形をしていたな、相当のGを受けたはずだぞ。まったく私の説明を聞かずに無茶をして」

グラ 「ああ、確かに辛かったが吐血をしたぐらいだ。問題ないだろう、私にとっては日常茶飯事だ」

千冬 「・・・はあ、お前は後で精密検査だな。お前、自分がどんな無茶をしたか自覚してないだろ」

グラ 「?・・・私はなにか大変な無茶をしたか？無茶といえば唯、移動変形をしただけだろう。Gに耐えなくてはいけないが、それ程のものか？」

グラ 「そもそも、フラッグは可変機体なのだし移動しながらの変形を前提にしているのではないのか？」

千冬 「・・・まったく、呆れた男だな。いいか？確かにフラッグの変形は移動しながらでも可能なように出来ている。だが、それは人型でも出せる速度の時での話だ。高機動形態時の最大速度で変形

するようにはできていない」

千冬 「まず、変形する理由がそもそも人型では不可能な速度を出すためだ。それなのに、高速移動中に減速もしないで人型に変形なんてしたら、それは人型で不可能な速度を無理やり出していることにほかならないだろう」

千冬 「機体や操縦者に多大な負担が掛かるのは当たり前だ。ただでさえお前のフラッグは操縦者の負担を無視して作られているんだ。操縦者の負担は殺人的なものになる」

千冬 「事実、今日の試合での変形では10Gを超えるほどの重力が掛かっていたぞ。これは、常人ならそく失神や大怪我をするほどのものだ。場合によっては死んでもおかしくない」

グラ 「・・・そうか、そんなに危険なものとは思わなかったな」

グラ （たしか、カスタムフラッグ（MS）の最大Gが12Gだとカタギリが言っていたな。それに耐えれたということは私は思いのほか異常なのか・・・）

グラ （いや。だが、あの時の私にはガンダムへの愛があったからな。愛の力のおかげだ）

千冬 「お前は自分の異常性と変態性を自覚したほうがいい。かなり、常軌を逸しているぞ」

グラ 「・・・薄々、自覚はしているさ」

千冬 「ふう、次に移動変形を行うときは緊急時以外はしっかりと

減速してからにしろ。いくら身体が頑丈でも、もしもの場合がある」

グラ 「承知した」

千冬 「よし。・・・ところで、お前はいつまでISを装着しているつもりだ？」

千冬 「そろそろ、見下ろされながら話すのは我慢できないな。ISを解除して待機形態にしろ」

グラ 「わかつ・・・待機形態？」

千冬 「はあ、覚えていないのか？授業でもやったぞ？」

グラ 「・・・すまない」

千冬 「待機形態とは、呼んで字の如くISを常に待機させておくための形態だ。これは基本的に専用機持ちだけが使用できる機能で、本来の大きさの何十分の一以上の大きさにすることができる」

千冬 「そして、その形態時の形は様々だ。セシリアのブルーティーズであればイヤークラスに変化する。お前のは一夏と同じくガントレットに設定してある」

千冬 「さて、ISが解除され一つの塊になるイメージをしろ。それでフラッグも待機形態に移行するはずだ。やってみろ」

グラ 「ふむ、こうか・・・？」

スウーーーーー

千冬・真耶「「!?!」」

グラ「なんと！本当にあの巨大なISが霧散するかのように消えただと!?!」

グラ「驚きだな。・・・だがISは何処に行った？待機形態になった筈だが」

千冬・真耶「・・・・・・・・」

グラ「ん？見たところ、どこにもないな。腕には何もなし、耳にイヤークラスがついてるわけでもない」

千冬・真耶「・・・・・・・・」

グラ「・・・・・・・・ん？すまないが、これはどういうことだ？千冬女・・・・どうしたのだ？」

千冬「・・・・・・・・織斑先生だ。どうしたもこうしたも、顔を見ても」

グラ「顔？顔に何か付いているのk・・・・!?!」チラッ

グラ「こ、これは・・・・、これが待機形態か？」

千冬「ああ、おそらくそうだろう」

グラ「しかし、待機形態はガントレットになるとさっき言ってなかったか？」



真耶 「・・・はい、そのはずなんですけど。どうしてなんでしょう？」

グラ 「いや、聞き返されても困るのだが・・・」

千冬 「ふむ、まあ気にするな。形は違えど待機形態にはできた、それでいいだろう」

グラ 「・・・承知した」

グラ （歪んだ『極』を目指し愚行に及んだあの日々、その象徴とも言えるこの仮面）

グラ （よもや、この形になろうとわな。これは何かの冗談か？乙女座でなかったとしても運命を感じずにはいられない）

千冬 「だが・・・いくら待機形態とはいえ、その悪趣味な仮面を四六時中被られるのは困るな」

グラ 「あ、悪趣味・・・・・・・・」

千冬 「本末転倒だが、普段は外して持ち歩けよ。なに、そんなに嵩張らないし可能だろう」

グラ 「・・・了解したが、仮面は着けるためにあるのでは？その方が格好いいではないか」

千冬 「日常的にそんなものをつけてたら変態として通報されても文句は言えないな。それに格好いいと思ってるのはおそらくお前だけだ。せつかく見て呉れただけは良いのだ、無駄にすることもないだ

グ  
ラ

ろ  
う

「  
・  
・  
・  
・  
・  
」

## 転校生はセカンド幼馴染（後書き）

遅くなつてしまい申し訳ありませんでした。  
引き続きお楽しみいただけたら幸いです。

## IS訓練？

グラ 「――そして私のはこの仮面。うむ、やはり素晴らしい意匠だな、・・・自然と昔のことが思い出されるのは少々厄介だが。しかし、・・・これの何処が悪趣味なのか、理解できない）スッ

一夏 「おお、グラハムの待機形態は仮面なのか！カッコいいな！武者みたいなデザインだし、漆黑だし」

グラ 「！」

グラ 「なんと、一夏にもこれの良さが分かるのか？」

一夏 「ああ、もちろんだ。男だったら分からない奴はいないぜ？多分」

グラ 「そ、そうだよな！流石、一夏だ。私が見込n」

一夏 「でも、普段から被ってたらすぐに引くけどな（笑）」

グラ 「・・・すまなかったな」

一夏 「ん？何がだ？・・・てか、ど、どうした？なんか威圧感がさ、殺気！？」

グラ 「・・・フッ、ひさしぶりに阿修羅すら凌駕したくなっただけさ」  
「ゴゴゴゴ」

千冬 「何を話し込んでる馬鹿者ども！オルコットは既に展開し終えたぞ早くしろ！」ガス、ガスッ

一夏 「はい」

グラ 「・・・はい」

一夏 （えーと・・・来い、白式！）

シュパッ！

千冬 「よし、次、グラハム」

グラ 「ーースウ、いくぞ！装・ちゃk」ゴッ！

千冬 「静かにやれ！静かに」

グラ 「はい」

千冬 「あと、わざわざ仮面を着けるな。被らなくても出来るはずだぞ？」

グラ 「それは、断固拒否させて頂く！」

千冬 「よs・・・なに？」

グラ 「拒否させて頂く！！」

千冬 「冗談を言っている目ではないな。どうした？今日はいつも

以上に变だぞ。なんで仮面に其処まで拘る？」

グラ 「……………」

千冬 「まあ、いい。もう一回、今度は静かに装着しろ。仮面を被るのは特別に許してやる」

グラ 「すまない。礼を言う」

千冬 「いちいち尊大だが、まあ、いい。……ふう、調子が狂うな、まったく」

グラ （ 来い！フラッグ！！ ）

シュパッ！

千冬 「よし。まったく、時間は掛かったが全員装着できたな。……飛べ！」

ギューン！

グラ （セシリアには遅れたな……。教本では『自分の前方に角錐を展開させるイメージ』らしいが、やはりまだ感覚がつかめていないな）

千冬 「織斑、グラハム、何をやっている。スペック上の出力では二機ともオルコットより上だぞ」

セシ 「グラハムさん、一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的ですよ」

グラ 「やはりMS同様マニュアル通りには行かないということか。あたりまえだが習練による慣れは何事においても必要だな」

セシ 「MS？」

グラ 「ああ、ただの乗り物の名称だ。昔乗っていた」

一夏 「でもさ、イメージって言われてもよく分かんないか？大体、空を飛ぶ感覚がまだあやふやでさ。なんで浮いてるの？これ」

グラ 「たしかに、気にしてなかったが言われてみると不思議だな。スラスターとバーニアが圧倒的に少ない。翼もあるにはあるが人型を飛ばすには小さすぎる気もする」

グラ 「それに翼の展開方向に関係なく移動できるところを見ると飛行機とは翼の役割自体が異なっているようだな」

セシ 「説明しても構いませんが、長いですわよ？反重力力翼と流動波干涉の話になりますもの」

グ・ー 「「わかった。説明してくれなくていい」」

グラ （カタギリが居るなら話は別だが、私には理解出来ないだろうな）

セシ 「そう、残念ですわ。ふふっ」

グラ （楽しそうに笑うな。いい笑顔だ。あの試合以来最初の軋轢は消えてしまったようだな、喜ばしいことだ）

グラ（不覚にも「乙女だ」と口走りそうになってしまった。・・・ん？なにか背後に気配を感じたような）

セシ「あの、グラハムさん。よろしければ放課後に一緒に練習をしませんこと？そのときはマンツーマンで教えて差し上げますわ」

グラ「おお、それは助かる。ぜひお願いする」

セシ「はい！」

千冬「三人とも何時まで其処に居るつもりだ！今は授業中だぞ、会話を花を咲かせるな」

千冬「織斑、オルコット、グラハム、急下降と完全停止をやつて見せる。目標は地表から10センチだ」

セシ「了解です。ではみなさん、お先に失礼しますわ」ギュンツ！

一夏「うまいもんだなあ」

グラ「ああ、やはり伊達に代表候補生ではないということだな」

千冬「次！」

グラ「よし、今度は私が行かせて貰おう」

グラ（『背中にロケットファイヤーを噴出しているイメージ』か。・・・こうか）ギュンツ！



グラ（ぬお！？は、速い！加減を間違えた、墜ちるか、クッ！）  
グウン、バシュー！

グラ（ふう、間一髪だったな。激突しなくてよかった、さらに怪我を重ねるかもしれないからな）

千冬「大したものだな。てっきり墜落、激突するものだと思って  
いたぞ。初心者は大抵そうなる」

グラ「運がよかった。もう少し停止が遅かったらまさにそう  
なっていた」

千冬「謙遜するのはいいが、たまには自分を褒めてやれよ。よし、  
次！」

この後、一夏は盛大に墜落、激突することになった。その衝撃たるや凄まじいものでグラウンドに少し小さめのクレーターが出来ていたぐらいだ。もうすぐで、自分もこうなっていたかと思うと正直肝が冷える。一夏には悪いが自分じゃなくてよかったと心底思ってしまったな。だが、それほどの衝撃でも一夏は無傷だった。ISの搭乗者保護機能は想像以上らしい。逆にこの機能を突破しうるISの装備の強力さもまた実感した。

## IS訓練？（後書き）

うーん、結構日にちを明けていたせいで各キャラをある程度ちゃんと書けているか不安ですw  
大丈夫ですよ？

## IS訓練？

千冬 「織斑、グラハム、武装を展開しろ。それくらいは自在にできるようになっただろう」

一夏 「は、はあ」

グラ 「了解」

千冬 「返事は『はい』だ」

グ・ー 「はい」

千冬 「よし。でははじめろ！」

一夏 （ 物体を斬る、刃のイメージ。鋭く、堅固な物体。強い、武器 ）

グラ （ フラッグ、右前腕の展開、抜刀。プラズマブレイド、斬り伏せる ）

グ・ー （（来い・・・！）） シュン

千冬 「織斑、遅いぞ。0・5秒で出せるようになれ。グラハム、展開時間は及第点だ。だが、わざわざ左手を右腕に持っていていかなくても出来るようにしろ」

一夏（やっぱり厳しいなあ、千冬姉。それでも1週間の練習の賜物なのに。まあ千冬姉が甘かったら、それは偽者確定だけどさ）

グラ（フラッグ MS の経験のおかげでイメージはしやすいな。だが、これだと自然と動作をしてしまう。やはり数をこなして矯正していくしかないか）

千冬「織斑、余計なことを考えるな！ グラハムを見習ってしっかりと反省をしろ」ゴッ！

一夏「ッ・・・はい、すみません」

千冬「次、オルコット。武装を展開しろ」

セシ「はい」 シュン

グラ（さすが手馴れているな。既に《スターライトmkⅠⅠⅠ》には弾倉もセットしてある。私よりも短い時間で射撃可能とするか、僅かな差だが戦場では勝敗を分かつ条件になりかねない）

千冬「さすがだな、代表候補生。ただし、そのポーズは止める。横に向かつて銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」

セシ「で、でも」

千冬「反論は努力してからにしろ。直せ、いいな」

セシ「・・・はい」

千冬 「では、次は近接用の武器を展開しろ。グラハムは射撃武装だ」

セシ 「えっ。あ、はっ、はい」

グラ 「はい」

グ・セ（くっ・・・）

グラ （プラスマブレイドと違ってイメージが掴みにくい）

千冬 「まだか？二人とも」

セシ 「す、すぐです。      ああ、もうっ！《インターセプター》！」  
シュン

グラ 「ちいッ、ライフル！」      シュン

千冬 「・・・何秒掛かっている。お前達は、実践でも相手に待ってもらうつもりか？」

セシ 「じ、実戦では近接の間合いに入らせません！ですから、問題はありせんわ！」

グラ 「私にライフルは不要だ。どんな猛攻だろうと敵の懐に入り込み必ず斬り伏せてみせるさ！」

千冬 「おい、お前達の発言は相反しているぞ」

千冬 「それに、オルコット。お前はグラハムとの対戦で初心者に

簡単に懷を許していたように見えたが？」

千冬 「そして、グラハム。お前は確かライフルが無ければ開始早々に撃墜されるところだったよな？私の記憶違いだったかな？」

グ・セ 「……………」

グラ 「…………だいぶ、子供っぽい屁理屈をこねてしまった。すまない。戦場では何が起こるか分からない、全てにおいて完璧が要求されるのを私は知っている。でなければ生き残れない」

セシ 「わたくしも子供すぎました。代表候補生たるもの、弱点を残しておいてしまうなんて許されないことですもの。努力しないと」

千冬 「分かればいい、励めよ。……さて、時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドは片付けておけよ」

一夏 (う……自業自得だけど、骨が折れそうだな。箒は……既に居ない)

一夏 (へん、いいもんね。グラハムに……居ない。じゃあ、セシ…………居ない)

一夏 「……………」

## IS訓練？（後書き）

ちよつと一夏の扱い酷くしすぎたかな？ごめんなw  
さて次回はようやく鈴の登場です。では、ノシ

## 邂逅、セカンド幼馴染

<夜、IS学園正面ゲート付近>

鈴 「ふうん、ここがそうなんだ・・・」

鈴 「えーと、受付ってどこにあるんだっけ」

鈴 「本校舎1階総合事務受付・・・・・・・・って、だからそれどこにあんのよ」

鈴 「はあ、自分で探せばいいんでしょ、探せばさあ」

グラ （ふむ、昼間は悪いことをしたから訓練中の一夏に差し入れでも思っで来てみれば・・・）

グラ （なにやら見慣れない少女がキョロキョロしているな。何かを探しているみたいだが、話しかけた方がいいのか？）

鈴 「ったく、出迎えがないとは聞いてたけど、ちょっと不親切過ぎるんじゃない？政府の連中にしたって、異国に15歳を放り込むとか、なんか思うところないわけ？」

グラ （それにしても、私並に独り言が多いな。傍から見るとこんな感じなのか・・・、私も自重しないとな）

グラ （さて、政府？異国？彼女は日本人ではないのか。うーむ、確かによく見ると違うな、中国人か？）



鈴 （誰かいなか。生徒とか、先生とか、案内できそうな人）  
キヨロキヨロ

グラ （！？ てっ、何を私は隠れているんだ？ いかんな咄嗟に体が動いてしまった。これではストーカーじゃないか）

鈴 （やっぱりこんな時間だから誰もいないか。あーもー、面倒くさいなー。空飛んじゃおうかな・・・）

鈴 （って、そんなことしたら最悪外交問題になりかねないわね。政府の連中も情けない顔で念押ししてたし）

鈴 （ふっふーん。まあねー、私は重要人物だもんねー。自重しないとねー）

グラ （おお、今度は不敵に笑いだしたぞ。・・・見ていて飽きないな）

鈴 （やっと日本に戻ってこれたな・・・）

鈴 （この日のためにずっと頑張ってきた、待ってきた。・・・アイツ、元気にしてるかなあ）

グラ （・・・い、いかん。これでは本当のストーカーだ！ さて、声をかけるか）

鈴 「ハア、早く会いたいよ・・・いちー」

グラ 「失礼する、その少女よ。なにか探しているのか？ よけれ

ば手伝うが」

鈴 「ッ！？／／」 バッ！

グラ 「どうした？」

鈴 「い、いつからそこにいたのよ！というか何で男が此处にいるのよ！」

グラ 「たった今通りかかったところだ。それと、勘違いされては困るが私は一応ここの生徒だ。決して変質者などではないから安心してくれ」

鈴 「ああ、なるほど。あんたが2人目の男でISを起動させたって奴ね。・・・もしかしてだけど、さっきの独り言聞いていたりした？」

グラ 「なんのことだ？　たったいま通りかかったところだからな、独り言？」

鈴 「そ、そう、聞いてないならいいわ。気にしないで」

グラ （最後のは聞き取れなかったが、全て聞いていた。なんて言ったら、なんだかただじゃすまない気がするな。微妙に殺気が滲み出ているし）

グラ 「それよりも、何か探しているのか？　キョロキョロしていたが」

鈴 「そう！　ちょうどよかったわ、あんた。総合事務受付って何

処、案内して！」

グラ 「それは構わないが、先にこれを友人に届けてやりたい。すぐそのアリーナで特訓をしているらしいから差し入れを、と思つてね。いいか？」

鈴 「別にいいわよ。さ、そうと決まった早く行くよ」

グラ （活発な少女だな、いいことだ）

テクテク

グラ 「よし、着いたな。渡してくるが、ここで待っているか？」

鈴 「うん、そうすー」

箒 「だから・・・でだな・・・」

鈴 （あ、声が聞こえてきた。なんだ、一夏じゃないのか。もしかしてっと思っただけ）

一夏 「だから、そのイメージがわからないんだよ」

鈴 （！？）

鈴 （この声は、一夏！）

鈴 「やっぱり、あたしも着いてく。アリーナの中見たいし」

グラ 「そうか」

鈴　（一夏、あたしってわかるかな。わかるよね。1年ちょっと  
会わなかったただけだし）

鈴　（大丈夫、大丈夫！もしわからなかったとしても、それはあ  
たしが美人になったからだし！）

鈴　（よし！）

箒　「一夏、いつになったらイメージが掴めるのだ。先週からず  
っと同じところで詰まっているぞ」

鈴　（え？）

一夏　「あのなあ、お前の説明が独特すぎるんだよ。なんだよ、  
『くいつて感じ』って」

箒　「・・・くいつて感じだ」

一夏　「だからそれがわからないって言って　おい、待てって箒  
！」

鈴　「・・・」

グラ　「どうした？行かないのか？」

鈴　「・・・教えて、受付の場所。あとは1人で行く」

グラ　「そ、そうか。それなら、その校舎が本校舎だ。その1階  
にいけばすぐ見つかると思う」

鈴 「そう、ありがと。それじゃ」テクテク

グラ （行ってしまった。どうしたのだ？いきなり不機嫌に・・・、まあ、いいか）

鈴 （誰？あの女の子。なんで親しそうなの？名前で呼び捨てだったし。っていうかなんで名前でよんでんの？）

鈴 （もしかして彼女とか？いや、そんなはずないわよね、でも・・・。ああ、モヤモヤする）

鈴 （そういえば、さっきのあいつに聞いたけばよかった、友人っていつてたし。そういえば、ちよつと失礼だったかな案内してくれたのに）

鈴 （いや、今はそんなことよりも一夏とあの女子のことで・・・）

\*\*\*\*\*

受付 「はい、以上で手続きは終了です。IS学園へようこそ、鳳鈴音さん。なにか質問はある？」

鈴 「織斑一夏って、何組ですか？」

受付 「ああ、噂の子？1組よ。鳳さんは2組だからお隣ね。そうそう、あの子1組のクラス代表になったらいいわよ。やっぱり織斑先生の弟さんだけはあるわね」

鈴 「2組のクラス代表って、もう決まっていますか？」

受付 「決まってるわよ」

鈴 「名前は？」

受付 「え？ええと・・・聞いてどうするの？」

鈴 「なにもしませんよ。ただお願いしようと思って。代表あたしに譲ってって」「ニコッ

## 代表就任パーティー

<夕食後、寮内食堂>

ク女A「というわけでっ！織斑くん、おめでとう！」

ク女S「おめでと〜！」パン、パンパン！

一夏「……………」

一夏（めでたくない。ちつともめでたくないぞ。なんなんだこのパーティーは！？）壁をチラリ

一夏（なにに、『織斑一夏クラス代表就任パーティー』か。・余計にめでたくなかったな。自分のためにパーティーまで開いて祝ってくれるのは有難いけど）

一夏（当の本人があんまり気乗りじゃないのが問題だよな。そりやるからには全力で取り組むけどさ・・・複雑な心境だ）

ク女A「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

ク女？「ほんとほんと」

ク女B「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

ク女？「ほんとほんと」

一夏（あれ？相槌うつてるあの子って2組だったような・・・気のせいか？というか人数多くないか、30名以上絶対いる）

第 「人気者だな、一夏。楽しいだろう？」

一夏 「・・・あの、なにやらお怒りですか？第さん」

第 「ふん」

薫子 「はい！突然ですけど新聞部です！今日は話題の新生、織斑一夏君とグラハム・エーカー君に特別インタビューをしに来ました、イエーイ！」

薫子 「あ、私は2年の薫子、一応新聞部副部長をやってるよ。よろしくね。はいこれ名刺」

一夏 「あ、これはご親切にどうも・・・というか何で名刺なんてもってるの？」

薫子 「ん？カッコいいからだよ！ではではずばり織斑君！クラス代表になった感想や意気込みをどうぞ！」

一夏 「えーと・・・ISの総装着時間は少ないですが、それが戦力の決定的差ではないことを教えてやろうと思います」

第 （なんで妙に芝居がかっているのだ？らしくもない）

薫子 「おおー、いいね！いいよ、そういうコメントもつとガンガンちょうだい！」



薫子 「よし、次はグラハム君试试看よー。クラス代表になる織斑君に同じ男性操縦者として一言どうぞ！」

グラ 「前回の一夏の戦いを見ることは出来なかったからな。括目させてもらおう、一夏！皆の思いを胸に、その手で未来を斬り開け！！」

第 （グラハムは相変わらずだな・・・）

一夏 「おう！まかせとけ。・・・気乗りしてなかったけど、だんだんやる気が沸いてきた！」

薫子 「よし、今日はいいいコメントが多くて助かるよ、改変する手間が減るからね。じゃあ、次はセシリアちゃんもコメントちょうだい」

セシ 「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですね」

セシ 「コホン。ではまず、どうしてわたくしがクラス代表を辞退したかという、それはつまり」

薫子 「ああ、長そだからいいや。やっぱり写真だけちょうだい」

セシ 「さ、最後まで聞きなさい！」

薫子 「いいよ適当に捏造するから。はいはい、とりあえず3人並んでね、写真撮るから」

セシ 「えっ？」

薫子 「注目の専用機持ち3人だからねー。いい絵になるよ、やっぱり」

セシ 「そ、そうですか……。あの、撮った写真は当然いただけますわよね？」

薫子 「そりゃもちろん」

セシ 「でしたら今すぐ着替えて」

薫子 「時間掛かるからダメ。はい、さっさと並ぶ」

セシ （思いもかけずにグラハムさんと写真が撮れますわね。グラハムさんみたいに言ったら、『なんという僥倖！』ってところかしら、ふふっ）

薫子 「……………」

一夏 「何だよ、薫？」

薫子 「何でもない」

薫子 （ここで、自分も一緒に撮りたいと言えたらどれだけ楽なのだろうな、ハア）

薫子 「それじゃあ撮るよー。35×51÷24は？」

一夏 「は？え、えっと……」

グラ 「およそ70だ！一の位は無視させていただく」

薫子 「それじゃだめだよ。一の位も仲間に入れてあげないと。  
答えは74.375でした」

一夏 「暗算でそれは難しすぎ」

パシャ！

セシ 「・・・な、なんで全員入っていますの！」

ク女A 「セシリアだけ抜け駆けはないでしょ」

ク女B 「クラスの思い出になっていいじゃん」

ク女？ 「ね」

セシ 「う、ぐ・・・」

セシ 「そんな・・・、せつかくのチャンスが・・・うう」

代表就任パーティー（後書き）

早く戦闘シーンを書きたいですw

## 鈴と一夏

<翌朝、IS学園1年1組>

ク女A「織斑くん、グラハムくん、おはよ。ねえ、転校生の噂聞いた？」

一夏「転校生？　いまの時期に？」

ク女A「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

一夏「ふーん」

グラ（中国か・・・ん？　最近ここで中国人に会ったような・・・そうか、あの少女がもしかして）

セシ「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

箒「でも、このクラスに転入してくるわけではないのだろう？　騒ぐほどのことでもあるまい」

ク女A「うん、たしか隣の2組に転入するって聞いたよ」

一夏「隣かあ、どんなやつなんだろうな」

グラ「ああ、おおいに気になるな」

セシ 「！？ 気になりますの？」

グラ 「む？ それはそうだろう。相手は国家代表候補生、つまり専用機持ち。私には、無視することはできないさ」

セシ 「なんだ、そういうことですの。・・・よかったですわ」

グラ 「なにがだ？」

セシ 「い、いえ。何でもありませんことよ。気にしないでくださいまし！」

第 「・・・一夏、お前も気になるのか？」

一夏 「ん？ああ、少しな」

第 「ふん……。今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？ 来月にはクラス対抗戦があるというのに」

セシ 「そう！ そうですわ、一夏さん。クラス代表を譲ったのですから、わたくしの分も活躍して頂かないと」

一夏 「わかってるよ。まあ、やれるだけは頑張ってみるけどさ」

セシ 「やれるだけでは困りますわ！ 一夏さんには勝っていただきませんと」

第 「そうだぞ。男たるものそのような弱気でどうする」

ク女A「織斑くんが勝つと、フリーパスゲットでクラスみんなが幸せだよ」

グラ「・・・皆はこう言っているが、気にするな。気負いすぎては空回りするだけさ、いまの心持でちょうどいいと思うがな」

一夏「サンキュ。そう言ってくれると助かるよ、ほんとに」

ク女A「でもさ、今のところ専用機持つてるクラス代表って1組と4組だけだから、余裕だよな」

？「その情報、古いよ」

？「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

一夏「！？ 鈴・・・？ お前、鈴か！」

鈴「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

グラ「やはり、彼女か。でも、先日と雰囲気が違うような・・・」

一夏「何格好付けてるんだ？ すげえ似合わないぞ」

鈴「んなつ・・・！？ なんてこと言うのよ、アンタは！」

グラ「おお、元に戻ったな。どっちが地かは知らないが」

千冬「おい」

鈴 「なによ!？」クルツ、バシン!

千冬 「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

鈴 「ち、千冬さん……」

グラ (……顔色が変わったな。どうやら千冬女史が得意ではならしい。まあ、ことあるごとに出席簿が飛んできては誰でもそうなるか)

千冬 「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、入り口を塞ぐな。あとグラハム、私は理由もなしに力を振るうことはない。失礼なことを考えるな」

鈴 「す、すみません……」

鈴 「またあとで来るからね!逃げないでよ、一夏!」

千冬 「さっさと戻れ」

鈴 「は、はいっ!」タタタッ!

鈴 (邪魔が入っちゃったけど……一夏、すぐにあたしだって気付いてくれたな……。これっていい反応よね!)

一夏 「っていうかアイツ、IS操縦者だったのか。初めて知った」

第 「……一夏、今のは誰だ? 知り合いか? えらく親しもうだったな」



ク女「ねえねえ、一夏くん。転校生との関係性を詳しく教えてよ」

千冬「SHRの時間は始まっているぞ。席に着け馬鹿ども」バシバシン！

一夏「うーん、しかしなんでまたこう知り合いとばかり再開するんだろうな。人生っていうのは不思議なもんだなあ」

グラ「ああ、人生というのはそういうものさ、不思議なことばかりで辟易しかねん」

千冬「お前は早く席につけ！」バシ！

## 一夏と鈴、その歪

< 昼放課、食堂 >

第 篇 「おい、一夏！朝の転校生とはどういう関係だ？ 詳しく聞かせてもらっぞ！」

一夏 「あゝ、わかった、わかった。だけどまずは席に着くことにしようぜ。えゝと、どこか空いてないかな」「キヨロキヨロ

鈴 「やっと来たわね、一夏！」

一夏 「おお、鈴、奇遇だな。席空いてるみたいだし、同席してもいいか？」

鈴 「え？ す、好きにすれば？・・・というかその為に席確保しておいたんだけど」

一夏 「ん？ なにか言ったか？」

鈴 「べ、別に」

一夏 「そうか。じゃあお言葉に甘えてすきにさせてもらっぜ」ガ  
タッ

一夏 「それにしても久しぶりだな。ちょうど丸一年になるのか。元気にしてか？」

鈴 「げ、元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病気しなさいよ」

一夏 「どういう希望だよ、そりゃ・・・」

一夏 「で、いつ日本に帰ってきたんだ？ おばさん元気か？ いった代表候補生になったんだ？」

鈴 「質問ばっかしないでよ。アンタこそ、なにIS使ってるのよ。ニュースで見たときびっくりしたじゃない」

第 「あー、ゴホンゴホン」

第 「一夏、そろそろどういう関係か説明して欲しいのだが」

セシ 「一夏さんは、もしかしてこちらの方と付き合ってるの？」

鈴 「べ、べべ、別に私は付き合ってるわけじゃないけど・・・」

一夏 「そうだぞ。鈴とはただの幼馴染って関係だよ。なんでそんな話になるんだ」

鈴 「・・・」

一夏 「ん？ なんで睨んでるんだ？」

グラ 「・・・お前のせいだと私は思うぞ」

グラ 「ところで、幼馴染だと？ なんで同じ幼馴染だという第が

知らない様子なのだ？」

一夏 「えーと、それはだな。箒と入れ違いで転校してきたんだよ。箒が引越したのが小4の最後で、鈴は小5の始めに来た。そこから中2の最後に鈴が国に帰るまで一緒だったんだ」

一夏 「で、鈴。こっちが箒。ほら前に話しただろ？ 小学校からの幼馴染で、俺の通っていた剣術道場の娘」

鈴 「ふうん、そうなんだ」

鈴 「初めまして。これからよろしくね」

箒 「ああ、こちらこそ」

グラ （表情こそ笑顔だが・・・この禍々しいプレッシャーはなんだ！？）

<夜、寮内一夏・箒の部屋>

鈴 「という訳で部屋、あたしと代わってね」

箒 「という訳とはどういうことだ！なぜ私がそんなことをする必要がある？」

鈴 「いやあ、年頃の男女が同じ部屋だとなにかと気苦労が絶えないでしょ？ その点あたしは、そんなこと微塵も気にしないから。よかったら代わってあげようかと思って」

箒 「必要ない！ たしかに気苦労は多いが、別に嫌ではないからな。それに！ これは一夏と私の問題だ。部外者はく」

鈴 「大丈夫、あたしも幼馴染だから。部外者じゃないわよ」

箒 「だから、なんでそれが部外者ではない理由になるのだ！」

一夏 「……………」

一夏 （一体、どうしてこうなったんだ？）

一夏 （箒とアリーナで訓練した後に鈴と出会って、それで少し談笑をただけなのに……………なんでこんな状況に？）

一夏 （……………でも、そいえば箒が部屋の話をしたあとから鈴の奴、妙に興奮してたような。まさか、それが予兆だったのか！？）

一夏 （ああ、なんで気付けなかったんだ。気付いて回避するべきだったのに、……………先生、この空気にもう耐えられません！）

一夏 「なあ、鈴」

鈴 「うん」

一夏 「それ、全部荷物か？」

鈴 「そうだよ。あたしはボストンバック一つあればどこでも行けるからね」

一夏 「あらためて思うけど、すごいフットワークの軽さだな。」

鈴 「で、とにかく、あたしも今日からここで暮らすから」

箒 「な！？ そんなこと私が許さないぞ。ここは私の部屋だ！」

鈴 「でも、ここは『一夏の部屋』でもあるでしょ？ なら、問題なしよ。ねえ、一夏は別にいいよね？」

一夏 「そりゃ、別にいい……何でもありません」

一夏 （箒、睨みすぎだぞ……。メデューサも真つ青な眼力だよ）  
ガクブル

箒 「とにかく！ 部屋は変わらない、これは決定事項だ。出て行くのはそちらだ、早く自分の部屋に戻れ！」

鈴 「でさ、一夏。その……約束って覚えてる？」

一夏 「や、約束？」

鈴 「うん、小学生のころにした約束。覚えてる……よね？」

箒 「む、無視をするな！ ええい！ よくも私を無視してくれる、こうなれば力づくで……」ブンッ！

一夏 「ちょ、馬鹿……」

バシンッ！

一夏 「鈴！ 大丈夫か！？」

鈴 「・・・ふふっ、大丈夫に決まってるじゃん。今のあたしは代表候補生なんだから！」

一夏 （本当だ。ISを部分展開して見事に木刀を受け止めてる・・・ふう、よかった、本当によかった）

一夏 （・・・でも、完全に死角からの攻撃だったぞ！？ それも突然の。ISの展開速度は人間の反射限界を超えないから、到底、生半可な実力では対処できない！）

一夏 （つまり、それだけの実力を、少なくとも死角からの攻撃に難なく対応するほどの実力を、鈴は持つてるってことか？）

一夏 （もしクラス対抗戦で鈴と当たったら、俺は勝てるのか？）

鈴 「ていうかさあ、今の攻撃、生身の人間だったら相当危ないよ？いくら頭に血が上ってても、最後のラインは守らなくちゃ」

篤 「う・・・」

篤 （また私は・・・感情に任せて力を使ってしまうなんて、あの頃のままではないか・・・）

鈴 「ま、いいけどね」

鈴 「それで、一夏！覚えてるの？」

一夏 「え？」

鈴 「小学生のころの約束！」

一夏 「あ、ああ。え〜と、ちょっと待ってくれよ。うん．．．あ！もしかしてあれか？ 酢豚がどうかいうやつか？」

鈴 「そ、そうっ！ それ！」

一夏 「たしか、こういう内容だったよな。『鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を』」

鈴 「うんうん」

一夏 「 おごってくれる』ってやつ」

鈴 「う．．．．．はい？」

一夏 「だから、鈴が料理出来るようになったら、俺に飯をこちそうしてくれるって約束だろ？」

一夏 「いや〜、我ながらたいした記憶りよ」 パァン！

一夏 「へ．．．．？」

鈴 「．．．．．」

一夏 （え？ 今なにかまずいこと言ったか、俺？ って！？ 鈴のやつ、肩震わして．．．）

一夏 （も、もしかして、泣かせてしまったのか？）



一夏 「あ、あのだな、鈴。その・・・」

鈴 「さ・・・てい」

一夏 「は、はい？」

鈴 「最つつつ低！ 女の子との約束を覚えてないなんて、犬に  
噛まれて死んじまえ！」 ダツ！

一夏 「お、おい！ 待て、鈴！」 バタン！

一夏 「・・・まずい、怒らせちゃった」

箒 「なあ、一夏？」

一夏 「は、はい」（この世に人を震え上がらせる笑顔ってあるんだな・・・）

箒 「馬に蹴られて地獄に落ちろ」

一夏 「・・・はあ」

一夏 （どうしよう、鈴、明日には機嫌直ってるかな？ 直ってないよなあ、やっぱり）

一夏 （ああ、なんでこんな面倒くさいことになったんだろ・・・  
助けてくれ、グラハム）

翌日、生徒玄関前廊下に大きな掲示があった。表題は『クラス対抗

戦日程表』

一回戦、織斑一夏の対戦相手は2組

鳳鈴音だった。

## 一夏と鈴、その歪（後書き）

次回はようやく一夏VS鈴です。

また、ちょっとしたサプライズもあるので乞うご期待！

あと、通りすがりの髭達磨さんが、このSSの素敵なイラストを描いてくれました。

まだ見てない人は『みてみん』でグラハムと検索してみてください！

## 不穩の前兆

<同日夜、IS学園・食堂>

鈴 「でさ、一夏の奴なんて言っただと思う？ 『毎日酢豚をおごってくれる』って言ったのよ！ 信じられない？」

鈴 「『おごってくれる』って何よ！？ 普通、毎日っていったら・・・その、ああいう意味じゃない！」

鈴 「まったく、何でアイツは」

グラ 「・・・・・・・・」

グラ （一体なぜ私は、このような状況に置かれているのだ？）

グラ （何やら愚痴られているが、困ったな。こういった話題は苦手なのだが・・・）

グラ （ハア・・・放課後、セシリアとISの訓練をしたからな、小腹が空いたと思って食堂に来てみれば、この様か）

グラ （鈴が、なにやら物凄い勢いで料理をがつついていたら声を掛けてみたものの・・・失敗だった。よもや自棄食いだっただとは）

グラ （こんなことなら、セシリアを誘ってこればよかった。まあ、過ぎたことを悔やんでもしかたないが）

グラ（ところで、鈴は何について怒っているのだ？ どうやら予想通り一夏に関係したことのようではあるが）

グラ（それにしても、凄い剣幕だな・・・一体何をしでかしたんだかな、一夏は・・・）

鈴「ねえ、あんたもそう思うわよね？」

グラ「む？・・・すまないがもう一度簡単に説明してくれ」

\*\*\*\*\*

鈴「っていつ訳よ。どう？ 酷いと思うでしょ！」

グラ「・・・」

鈴「もう一夏とは、しばらく口を利かないようにしてやる。そうすれば少しは反省して、むこうから謝りに来るってんでしょ！」

グラ「・・・言い難いが多分一夏は来ないぞ」

鈴「え！？・・・」

グラ「付き合いはまだ短いが、一夏は私並かそれ以上に人の感情の機微や言動の裏を推し量るのが苦手そうだと感じたから・・・」

グラ「それに、楽天的な部分もある。また鈴とは幼馴染なのだろう？ つまり気心が知れているということだ」

グラ 「おそらく一夏はそのうち機嫌を直してくれるだろうと考えて、何もアプローチしてこないぞ？」

鈴 「う．．．言われてみると、そうなる予感しかない．．．」

グラ 「あと、これは私が言えたことではないが、一夏が鈍感すぎることも確かに悪い．．．が、明確に言ってなかった鈴にも落ち度があるのではないか？」

鈴 「あう．．．め、明確になんて無理にきまつてるでしょ！」

グラ 「なら、一夏を許してやれ」

鈴 「な！？．．．い、嫌よ。むこうから謝ってこないと！」

グラ 「明確に言葉にしていないのに全てを分かれ、と期待するのは横暴すぎるだろう？」

鈴 「そ、そうだけど．．．」

グラ 「ただでさえ、人と人とはすれ違い、たやすく争いや争いを引き起こす」

グラ 「言葉なくして、対話なくして分かり合えるほど人間は賢く、便利な生き物ではない」

グラ 「だが、逆に．．．十分な対話が、話し合いがあれば人は、世界は分かり合えるはずだ。そう少年が教えてくれたように」

グラ 「だから、鈴。憤る気持ちも分かるが遠ざけるのではなく、

逆に一步近づいてみてはどうだ？ 無論、こちらから」

鈴 「でも・・・その、気まずいし」

グラ 「たとえ気まずくとも、言いたいことはしっかりとっておけ・・・そうしたくとも、絶対にできなくなる前に」

鈴 「グラハム・・・」

グラ 「・・・いや、すまない。今は、ただの私の感傷だ。鈴には関係ない、忘れてくれ」

鈴 「・・・うん、そうよね。あんたの言う通りだよ。やっぱり、もう一度一夏と話し合ってみることにする」

グラ 「そうか」

鈴 「ありがと。おかげで、ちよつと気持ちがスッキリした」

グラ 「なら、なによりだ」

鈴 「ふう。それにしても、あんた普段の言動と違って意外と大人な考えを持つてんのね。驚いた」

グラ （まあ、実際34で、世間一般から見れば立派な大人だからな。これぐらいは、言えないといけないだろう）

鈴 「でも、話し合うかあ。どうしたらいいんだろ？ やっぱり気まずいしなあ・・・」

グラ 「・・・だったら、こうしたらどうだ？ さっき山田女史に聞いたが、クラス対抗戦の一回戦の相手は一夏らしい」

鈴 「え！？ それ本当？」

グラ 「ああ。そこでだ、負けたほうが勝った方を遊びに連れて行く、という内容の賭けを一夏に持ちかけるんだ。この際、約束の件は置いておいて」

グラ 「一夏はセシリアの時もそうだが、だいぶ負けん気が強いようだ。おそらく乗ってくる。そうすれば、後は試合に勝つだけだ」

グラ 「話し合いは、遊びに行ったときに頃合を見てすればいい。・・・という作戦だが、どうだ？」

鈴 「うん・・・それなら自然に出来そうな気がする」

鈴 「でも、あんた仮にも1組でしょ。いいの？ あたしに勝てだなんて」

グラ 「別に私は勝ってくれと応援するわけではない。案を提示しただけだ。もちろん一夏を応援させてもらうから、問題ない」

鈴 「ふうん。なら遠慮せずに一夏を倒せばいいってことね。・・・よし、そうするわ！」

鈴 「あらためて今日はありがとね。さっきまでは沈んでたけど、一気に元気になったわ。じゃあ、あたしは部屋に帰って寝ることにするから、それじゃ！」 ダッ！



グラ（・・・若いな。これが青春か、悪くない）

<某日、某国某所>

?? 「・・・へい、わかってますって。奴さんは貴重なサンプル、必ず生かして連れ帰ってんでしょ？」

?? <<そう、その通りだよ。彼は絶対に必要不可欠な存在だからね・・・、僕による僕の計画、人類を革新へと導くこの僕のために>>

?? 「そうですかい。正直、興味ありませんわ。俺は戦争が出来るやあ、それで十分です」

?? <<ふう、確かに君には関係のない話だね。仕事をこなしてくれさえすれば、それでいいよ>>

?? 「殺しちゃならねえ、つてのは俺の性分にあわねえが・・・奴さん以外は別に構わないですよ、大将？」

?? <<君も大概だね・・・いいよ、彼を生きて連れて来さえすれば、後は何をしてるね>>

?? <<じゃあ、成功を祈っているよ。くれぐれも慎重にね・・・>>ピッ！

?? 「へへっ、ひさしぶりに愉しくなってきた！ ようやく、こいつが使えるなあ、おい！」

？  
？  
「いただくぜえ・・・織斑一夏！」

## 不穩の前兆（後書き）

書き忘れていました、すいませんが。

グラハムの部屋は監視等の理由で個室となっております。

## 鮮血の暴君

クラス対抗戦当日、第二アリーナ第一試合。そのアリーナ内、空中にて織斑一夏と鳳鈴音は対峙していた。どちらとも、その身にISを纏って。

噂の新生生同士の戦いであって、アリーナは全席満員、前日までに生徒による指定席騒ぎまであったほどだった。通路ですら立ち見の生徒に埋め尽くされている。それでも収まりきらなかった生徒や関係者はリアルタイムモニターによる中継を鑑賞している。

「一夏、この間の賭け・・・覚えてるわよね？」

鈴音が一夏に静かに問いかける。その声は試合前だというのに驚くほどに落ち着いている。代表候補生としての実力と経験がその冷静さを裏打ちしていた。

「ああ、すっかり覚えてるよ。心配するな。この試合、鈴が勝ったら俺が鈴を遊びに連れて行く、だろ？」

「そうよ。あとっておくけど・・・ふ、2人でだからね？ いいわね？」

「ああ。その代わり、俺が勝ったらこの間の理由を説明してもらうからな」

「う・・・わ、わかってるわよ」

鈴音に少し動揺の色が奔る、その頬はほんのり赤く染まっていた。どうやら、試合後のことを思案しているようだ。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

試合開始に向けてアナウンスが流れる。それに促され一夏と鈴音は移動する、その距離は5メートル、試合開始は目前だった。

「一夏、全力で来なさいよ。あたしも全力でいくから」

先程の動揺が完全に消えた声で鈴音は言う。すでに、その目は戦士のそれに変わっていた。代表候補生に相応しい集中力を感じさせる。

「おう！ 当たり前だ、最初から全力で行かせて貰うぞ！」

負けじと、一夏も気迫のこもった声で応えた。その集中力は勝るとも劣らない程、非凡なものを感じさせられる。勝敗の行方は誰にも分からないだろうと言えた。

『それでは両者、試合を開始してください』

ブザーの音がアリーナに轟き、試合の火蓋は切って落とされた。短くて長い、波乱の試合の。

ブザーの音が鳴り終わる刹那、両者は動いていた。一夏は瞬時に『雪片式型』を形成、展開。鈴は異形の青龍刀、『双天牙月』を手に接近する。

ガギンッ！！

盛大に轟音を上げ、初撃が斬り結ばれる。 クロス・グリッド・ターン 三次元躍動旋回をどうにかこなすも、体勢を大きく崩したのは一夏。

「ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど」

鈴音はその隙を見逃さない。『双天牙月』をバトンのように自由自在に回転させ、追撃を加えんと再度肉薄する。両端に刃のついたそれは、縦横斜めと鈴音の手によって変幻自在に角度を変えて一夏を攻め立てる。それは、高速回転をしていることも加わり、捌くことは並大抵ではない。

（まずい！ このままじゃ消耗戦になるだけだ。一度距離を取って）

だから、一夏がこの思考に至るのは至極当然であった。それは現状、最善の一手の一つでもある。鈴音が近接武装しか持たないという前提条件の下での話に限定されるが。

「甘いつー！！」

鈴音のIS。第三世代『シェンロン甲龍』の特徴の一つ、肩の非固定浮遊部位であるスパイク・アーマーがスライドして開いた。中心の球体が閃光を孕むと同時に、一夏が見えざる衝撃に『殴り』飛ばされる。

「今のはジャブだからね」

にやりと不敵な笑みを浮かべ、まだ状況把握の出来ていない一夏

に牽制に続いて本命を撃ち込む。

「ぐッ！」

ドンッ！ という鈍い音を上げ一夏が地面に叩きつけられた。鋭い痛みがシールドバリアー越しに彼に届き、顔を歪ませる。すでに、エネルギーの6割近くが削られていた。状況は誰が見ても一夏の劣勢。挽回の一手が早急に必要状態に追い込まれていた。

<アリーナ内ピット>

第 「何だあれは！？」

セシ 「『衝撃砲』ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃、それ自体を砲弾として撃ち出す・・・第三世代兵器の一つですわ」

グラ 「つまりは、不可視の砲身と弾丸ということか！？」

セシ 「ええ、おそらく。わたくしの砲撃をあそこまで避けた一夏さんが、こつも容易く被弾しているところを見ると・・・その可能性が一番高いですわ」

グラ 「砲弾のみならず砲身まで見えないとは厄介だな。射線予測による回避が困難になる・・・どう戦うつもりだ、一夏」

第 （一夏・・・どうか無事でいてくれ）

「よくかわすじゃない。衝撃砲『龍砲』は砲身も砲弾も目に見えないのが特徴なのに」

試合開始から10分。もう被弾をすることは許されない一夏はハイパーセンサーを『龍砲』に集中させ、空間の歪み値と大気の流れの微妙な変動を感知し辛うじて回避を成功させていた。だが、防戦一方である。回避に精一杯で接近することが出来ない。しかし、例え接近することが可能となっても再度『双天牙月』の餌食になるだけだ。

この劣勢のなか、彼は姉のことを思い出していた。先週の姉との訓練を。彼の右手が決意を表すかの如く『雪片式型』をきつく握りしめた。

（『バリアー無効化攻撃』、この一撃に全てを賭けるしかない。俺に残された唯一の切り札、イクニッション・フースト『瞬間加速』。出どころを見極める！）

鈴音を翻弄するように、衝撃砲を避けながら縦横無尽に一夏が疾走をはじめた。幸いなことに、加速性能においては『白式』は『甲龍』に勝っていた。少しづつ、だが確実に鈴音が翻弄され始める。

「ちい、ちょこまかと鬱陶しい！」

業を煮やした鈴音が苛烈な連射を開始する。その弾丸は雨のように一夏に迫る、当たればひとたまりもない。が、十分にスピードのついた白式を捕らえることは出来はしない。

いくら燃費と安定性を第一に設計されている『甲龍』とはいえ、所詮第三世代。無理な連射をすれば直ぐに限界が来る。そして・・・



雨が止む。

(!!！　ここだッ！)

それは、絶好のタイミングだった。一夏はそれを逃さなかった。

「うおおおっ！」

最初にして最後の一撃が叫び声とともに振るわれる。一夏は『瞬間加速』を発動する　　筈だった。

ズッドオオオオンッ！！！！

直前、爆音と共にアリーナ全体が震える。ステージ中央からは爆炎や粉塵が立ち込めた。その中には、妙に赤い物も混じっている。何かが、アリーナの遮断シールドを破り進入してきたのだった。次第に、煙は薄れた。だが、赤い粉塵だけは何時までたって其処にあり、むしろその濃さを増していた。

「　さあ、始めようじゃねえか。IS同士による、とんでもねえ戦争ってヤツをよお！」

そこには、鮮血の暴君がいた。

## 鮮血の暴君（後書き）

今回はいつもと形式が違い地の文ですが、どうでしょう？  
少しは分かりやすくなりましたかね？

## アリー・アル・サーシエス

「な、なんだ？ 何が起こって・・・」

突然の衝撃、爆発に状況の把握ができていない一夏は動揺を隠し切れていない声音で呟いた。と、白式が鈴音からのプライベート・チャンネルによる通信があることを伝える。

『一夏、試合は中止よ！ すぐにピットに戻って！』

同じく鈴音も動揺が多分に混じった声でそう伝える。その様子からは、現在の状況がかなり逼迫したものだということが感じとれるだろう。一夏もそれを感じとり面喰らうが、それも束の間、ISのハイパーセンサーが緊急通告、即ち何者かにロックオンされたことを伝えたことにより緊張に溢れた表情へと移った。

（なっ！？ 所属不明のIS？ もしかしてさっきの衝撃はそいつがアリーナに侵入したことによるものだったのか？）

一夏の予想通り、それは事実であつた。そして、一夏もそれを確信していた。現在の状況からは疑う余地もない。だからこそ、一夏はさらに動揺を大きくする。アリーナの遮断シールドとはISのシールドと同等かそれ以上の性能を誇っている、そしてそれを破り侵入したIS。つまりは非常に強力な攻撃力を有しているものにロックされていることに他ならない。

『一夏、急いで！』

「お前はとうするんだよ!？」

まだ、初めての相手との回線の開き方がわかっていない一夏はオプンチャンネルを使って聞いた。それに伴い鈴音もチャンネルを切り替える。

「あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ!」

「逃げるって・・・女を置いてそんなことができるか!」

「馬鹿! アンタの方が弱いんだからしょうがないでしょうが!」

こつも遠慮なく痛い事実を言われてしまつては、一夏には返す言葉はない。

「別に、あたしも最後までやり合つつもりはないわよ。こんな異常事態、すぐに学園の先生たちがやってきて事態を収拾」

ビシュウン!

「あぶねえっ!!!」

間一髪で一夏が鈴音を抱かかえ攪う。さっきまでいた空間は赤い粒子の塊が通過していた。

「ビーム兵器!! しかも、セシリアのものとは比べ物にならないほど強力だつて!？」

ハイパーセンサーが伝える事実はどれも驚嘆するものばかりだつ

た。そして一夏の動揺はさらに増すこととなる。

<アリーナ内ピット>

セシ 「一体全体、なにがどうなっていますの!？」

真耶 「わ、わかりません! アリーナ外から所属不明のISが侵入してきたとしか・・・」

第 「!?!? おい、今度はそのISが攻撃を仕掛けてきたぞ!」

第 「しかもビーム兵器・・・ッ。先生、早く救援を! このままだと一夏たちが・・・」

千冬 「ああ、わかっている。すでに手配した。いまごろ部隊は突入する直前のはずだ。安心しろ」

千冬 「なに、教師陣が到着すれば高がIS一機。すぐに事態は収拾す」

???? 『フフッ、そうはさせないよ』

真耶 「・・・はい。えッ!? た、大変です!!」

真耶 「たった今、救援部隊から何者かのクラッキングによりシステムの権限が奪取、こちらの操作を受け付けないとの報告がありました!」

真耶 「そして、アリーナ内の全隔壁が封鎖。さらに、遮断シールドレベルが4に変更されてます。部隊の突入は不可能です!」

第 「そ、そんな・・・」

セシ 「ま、まさかこれも侵入者の仕業ですか?」

千冬 「この状況から見るとそれしか考えられないな。厄介なことを・・・。これでは避難することも救援に向うこともできない」

千冬 「山田先生、すぐに緊急事態として政府に助勢を。それと、3年の精鋭をシステムクラックに。遮断シールドを解除できしだい再度突入を試みる」

セシ 「はああ・・・。今は待っていることしかできないのですね・・・」

千冬 「言っておくがシールドが解除されてもお前は突入隊には入れない。大人しくここに居るんだぞ?」

セシ 「な、何ですの!」

千冬 「ブルーティアーズは一对多向きだ。多対一ではその真価を發揮できない。それに、お前は所詮候補生だ。まだまだ未熟すぎる。フレンドリーファイアの可能性も高い」

セシ 「う……」

千冬 「また連携訓練は？ その時のお前の役割は？ ビットの配置は？ 味方の構成、敵のレベルは？ 連続稼動時」

セシ 「も、もういいですわ！ 結構です。わかりました。……はあ、言い返せない自分が悔しいですわ……」

千冬 「ふん、わかればいい」

千冬 「そして、勿論だがお前も同じ様な理由で突入は許さないぞ。此处で大人しくしている。いいなグラ……」

千冬 「……あいつはどこに行った？」

セシ 「え？ そういえばさっきから姿が……それに、篝さんも居ませんわ！」

千冬 「ちッ、あの馬鹿者共が……」

時間は少々遡り、正体不明のISがアリーナのシールドを破った直後、あの赤い粒子を見た瞬間にグラハム・エーカーは走り出していた。何か考えがあつての行動ではない。あの粒子を見た彼の脳裏に浮かんだものは唯一つ、そうGNドライブである。彼の人生に大

きく関わり、そして歪め、変革させた存在、ガンダム。さらにその象徴、GNドライブ。彼はいてもたってもいられず、言わば反射の如くひた走る。

（・・・まさかな。よもやここでガンダムと出会えようとは・・・やはり乙女座の私にはセンチメンタリズムな運命が付き纏っているようだ！）

言うまでもないが、件の侵入者がガンダムであるという確証はなにもない。赤い粒子を見たのは一瞬、見間違いの可能性もある。また、それがGN粒子ではなく、似た色をしたまったく別のものの可能性だってある。否、そちらの可能性の方が遥かに高いだろう。しかし、グラハム・エーカーには確かなる確信があつた。言葉に表すことはできないが絶対の自信がある。まるで、それは本当に運命に縛られているかのように。

（だが・・・あの粒子の色、もしもこの確信が本当であるならば、最悪の想定通りならば、一夏達が危険だ！ 危険すぎる！！）

グラハムは一夏達の下へとさらに急ぐ。前方からは、おそらく観覧席から避難してきたであろう生徒が見える。酷い混雑だ。誰もがみな我先に逃げようと争っていた。と、その時、けたたましい警告音が辺りに響き渡った。同時に、さらに前方、おそらく観覧席へと続く扉がある場所から悲鳴が聞こえてくる。見るとまだ避難していないものが大勢いるにも関わらず、扉の隔壁が降り始めていた。

「ちいッ！ 邪魔者は入れないということか。・・・つれないな、ガンダム！」

グラハムは即座にIS、フラッグを装着。生徒達の頭上を駆け抜



ける。次いで最早半分ほど閉まりかけている扉に滑り込むように入る。ここまでは、上手くいったが油断はしてられない。グラハムは観覧席を引き続き駆け抜ける、一夏の下へはこの先の扉を抜けられずだ。だが、隔壁は既に人がギリギリ入れる程度までに降りきっていた。グラハムはフラッグを変形、尚もスピードを増し、扉へと突っ込む。

ほぼ同時に、隔壁は重厚な音を立てて完全に閉じられた。何人もそこを通ることは不可能となる。だが、観覧席にグラハム・エーカ―、その人の姿はなかった。

「ちよつ、ちよつと、馬鹿！ 離しなさいよ！」

「お、おい！ 暴れるな。 って馬鹿！ 殴るなよ！」

おそらく一夏には何の問題も、他意もないだろうが、鈴音にはあった。お姫様抱っこをされている恥ずかしさに、たまらず一夏を殴りつける。

「う、うるさいうるさいうるさいっ！」

「だ、大体、どこ触って」

そして現在の状況に似つかわしくない遣り取りを繰り広げる一夏と鈴音を見ながら半ば呆れる人物が一人。ここはアリーナのステージ内、本来ならば居るのは一夏と鈴音だけ、もしそれ以外の第三者がいるとすればただ一人。そう件のIS、その装着者である。

（おい、おい、仮にも未確認のISが目の前に居るんだぞ。しか

もついさつき牽制してやったばかりなのに、お気楽すぎるだろ。まあ、さつきはいい動きをしたが、所詮学生ってことですかい)

彼の名前はアリー・アル・サーシエス。かつて優秀な傭兵、MSのパイロットだった男だ。だが、これは本名ではなく、数ある偽名の内の一つに過ぎない。その本名を知るものは既に一人としていなかった。戦争が好きで好きで堪らない、人間のプリミティブな衝動に殉じて生きる最低最悪の人間の本名を知った者は、深く関わった者は皆死んでいく。彼はまた、グラハム・エーカー同様に紛れ込んだ存在でもあった。あのソレスタルビーイングとリボンズ率いるイノベーターとの戦いの最中で戦死し、グラハムよりも先に辿り着いた。だが、グラハムとは違い彼の身体は死ぬ直前までの姿と同じであり、若返ってはいない。なぜ自分は此处にいるのか、その疑問も最初はあった様だが、彼は直に順応しその疑問は掻き消えた。じつに強かな人間である。戦いが、自分が活きる場があれば彼はそれで満足なようだった。

サーシエスは鬱陶しそうにその手にあるGNバスターソードをラifulモードで連射した。それは一夏達の注意を引く牽制であり当てるつもりは毛頭ない。結果も同様に当たりはしなかった。次にサーシエスは同じくGNバスターソードを今度は剣として大きく振るった。周囲の煙を振り払うために、注意を引いた一夏達に自らの姿を見せ付ける為に。

「なんなんだ、こいつ……」

一夏の驚きは尤もだった。目の前にいるのは、姿からして異形のISだった。深く濃い、それこそ血のような色をしたその体躯。人型からは少々逸脱した長い手足を持つ機体設計。背部と両脚部の三箇所から絶えず溢れ出る先刻のビームと同じ赤色の粒子。手に握られた、その身体の半分以上もの大きさの巨大な大剣。

そして、何よりも特異なのは『全身装甲』であることだった。通常、ISは部分的な装甲しか形成しない。『全身装甲』など一夏にとっては前代未聞だった。このことから相手は特別な存在であることが容易に推し量れる。また、全長も普通ではない。白式の優に1.5倍はあるその全身からは不気味な威圧感が漂っている。頭部のその顔も邪悪なデザインに感じられた。

「お前、何者だよ？」

「・・・・・・・・・・」

当然といえば当然だが、一夏の予想通り謎の乱入者、サーシエスは呼びかけに答

「・・・・・・・・・・俺か？」

えてしまった。

「！？　そ、そうだ。あんた何が目的だ？」

「目的ねえ。・・・それはデメエだよ！　織斑一夏あ！」

突如、狂気の声を上げサーシエスは襲い掛かった。一夏の視界は鮮血の赤へと染まる・・・。

アリー・アル・サーシェス（後書き）

更新が遅くなってしまう申し訳ありませんでした。

## V S サーシエス？

突如、一夏に肉薄したサーシエスはそれを両断せんとGNバスターソードを頭上から振り下ろした。しかし、対する一夏は咄嗟のことながらもぎりぎりですその斬撃を受け止める。雪片とGNバスターソードが搗ち合ったことによる盛大な金属音が辺りに響く。

「ッ！・・・俺が目的だって？　どういうことだよ？」

「・・・・・・・・」

一夏の質問に無言を貫きつつサーシエスはさらに苛烈に斬撃を繰り出す。だが、苛烈と言っても彼の実力の半分どころか三分の一も発揮されていないものだ。それでも、未熟な一夏には身に余るもので数度の斬撃を弾く度に状況は悪いものへと追い込まれていく。

「くッ！　っ、強い・・・！」

「はッ！　どうした、どうしたあ！！　その程度か？　もっと俺を楽しませてくれよなあ、ええっ！　織斑一夏さんよおっ！！」

「なッ！？　しまっ・・・」

一瞬の硬直、隙。それをサーシエスは見逃さず、GNバスターソードを真上に斬り上げる。すると、いとも簡単に雪片が一夏の手を離れ弾き飛ばされていく。

「ヘッヘへ、別に無傷で手に入れようだなんて思っちゃいねえ！  
悪いが痛い目みてもらうぜえ！」

雪片を失い、身を守る術をなくした一夏にサーシエスは容赦なく  
必殺の一撃、GNバスターソードを叩きこ……。

「……ああ？」

その直前、鈴音の衝撃砲『龍砲』の砲撃がGNバスターソードを  
大きく弾いた。

「ちよつと、あんた！ あたしの事を忘れてるんじゃない？」

鈴音がしてやったりと、得意気に勝ち誇る。その隙に一夏は離脱、  
雪片を回収して鈴音の横に並んだ。

「……ハア、止めときな、嬢ちゃん。せつかくの命あつての物  
種、無駄に散らすことになるぜ」

サーシエスが呟く。それは、静かな口調ではあるが並大抵の人間  
ならば震え上がり足が竦むであろう威圧感を内包していた。

「ふうん、向こうはやる気満々みたいね、一夏？」

「悪い、油断してた。次は大丈夫だ！」

「そう。……一夏、あたしが衝撃砲で援護するから突っ込みな  
さいよ。武器、それしかないんでしょ？」

「その通りだ。……よし、行くぞ！」

互いの武器の切っ先を当てることを合図に一夏と鈴が即席ではあるがコンビネーションで飛び出す。

「ハッハア！ いいねえ、楽しくなってきたじゃねえか。やつぱり戦いはこうでなくっちゃなあ！！」

サーシエスは心から歓喜の雄叫びを上げた。

<アリーナ内ピット>

真耶 「もしもし！？ 織斑くん聞こえますか？ 鳳さん！ 応答してください！」

真耶 「・・・駄目です。何度試しても、無線が通じません！」

セシ 「ジャ、ジャミング？ ならISのプライベート・チャンネルは？ あれなら妨害されるなんてことは・・・」

真耶 「駄目です。システムクラックにより使用不可・・・」

セシ 「そんなことって・・・！？」

千冬 「落ち着け、二人とも。そう焦ることはない、直にシステム奪取は終わる。そうすれば、解決だ」

真耶 「お、お、織斑先生！ 何を悠長なこと言っているんですか！？」

千冬 「興奮するな。ほら、コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

真耶 「・・・あの、先生。それ塩ですけど・・・」

千冬 「・・・なぜ塩があるんだ？」

真耶 「さ、さあ？ でもあの、大きく『塩』って書いてありますけど・・・」

千冬 「・・・」

真耶 「あつ！ やっぱり弟さんのことが心配なんですね！？ だからそんなミスを」

千冬 「・・・ミスではない。塩コーヒーを飲もうとしたただけだ。それに、エチオピアでは砂糖でなく塩を入れるのが主流だ」

真耶 「此処は日本ですよ？ それに、さっき糖分がどうと」

千冬 「山田先生、どうぞ。さあ、グイッとどうぞ。ダイエットにも効果があるらしいので」

真耶 「え？ でも塩なんて・・・」

千冬 「どうぞ」

真耶 「い、いただきます」



千冬 「熱いので一気に飲むといい」

セシ （あ、悪魔が此処にいますわ・・・）

真耶 「あ、おいしい！」

千冬・セシ 「・・・え！？」

「やはり、あれは・・・間違いない、ガンダムッ！？」

アリーナ内ステージの物陰に隠れてグラハム・エーカーは一夏と鈴をあやすかの如く容易くあしらっているISを観察していた。本当ならば今すぐにでも一夏たちの下へ駆けつきたい心を必死で抑えて。勿論、この間にも一夏達の身には危険が降りかかり続けているが、まだ動くことはできなかった。男として戦士としては卑怯だと詰られる行為ではあるが彼は軍人である、無策で行動することを許さなかった。策を弄しても同じ結果かもしれないが、失敗の可能性は減る。なのでグラハムは仲間を出汁に情報と機会を伺うことに一抹の罪悪感を感じながらも、過去に見た連邦軍の資料を思い出していた。

（あの特徴的なシルエットは・・・GNW-20000 アルケイガンダム！ 資料によれば搭乗者はアリー・アル・サーシェスだったか・・・経歴はリボンズ・アルマークの直属の部下で、ソレストルビーイング号での戦いで戦死となっていた筈だな）

愛がなせる業なのかなんなのか、彼はガンダムに関するデータなら常軌を逸している程に事細かに暗記をしているようだ。流石はグ

ラハム・エーカーといったところか。

（ガンダムスローネツヴァイの発展系で、改良前のGNドライブ「」を3基使用している。武装はGNバスターソードを筆頭にフアング等の強力なものがそろっているか……。これが、このままあのISに当てはまるなら厄介がすぎるな）

（それに搭乗者が戦死しているか……。まさか私と同様にしてということか？ それならば、一度話をして見たいが……。）

（しかし、なぜ奴はバスターソードしか使わない？ 単なる出し惜しみか、それとも武装はMS時とは異なっているということか？ ならば勝機はあるが……。）

グラハムは必死で情報を整理し、策を練ろうとする。が、その間にも戦闘は継続していき……。時は来る。

「！？ ちいッ、考える暇も与えてくれないか！ ガンダムッ！  
」

グラハムは物陰を捨てフラッグをフル稼働させて、アルケーへと迫った。

## VSサーシエス？（後書き）

更新が遅くて本当に申し訳ありません。なにとぞお許しください。

VSサーシエス？

「うっおおおおおおお！！」

一夏が気合の雄叫びを上げながら斬撃を繰り出す。

「おいおい、へなちょこな剣裁きだなあ！　なんで格闘戦専用機に乗ってんだよ？　当たるわきゃねーだろ！！　もつと頑張れねえのか、ええ？」

だが、その気合の一撃も実を結ぶことなく空を斬るばかりであった。

「くっ………！！」

「一夏っ、離脱！」

鈴音は一夏に警告しつつ、それを助けるために衝撃砲を放つ。が、サーシエスにそれは全て容易く回避されてしまう。掠る事さえ許してはくれなかった。けれども、まったく意味がなかった訳ではなく本来の目的通りに一夏の離脱の隙を作ることには成功していた。

「はあ、はあ、はあ……」

「大丈夫？　一夏」

「ああ、なんとかな」

一夏は息も絶え絶えに答える。

「はははははっ！ 仕留め損なったか…しぶてえ野郎だあっ！」

サーシエスが嘲りの意味を込め一夏に言葉をぶつけた。

（糞ッ！ よく言うぜ。あらかさまに手を抜いているくせして！）

事実、先程からの幾度の剣戟において一夏は何度となくミスをしている。ほんの些細なミスであり、一夏の技量ならば仕方のないミスであったが、サーシエスの前では致命的なものとなる。それは一夏にもわかっていた。だから何度も落とされると直感し身体を強張らせたのだが、結果はサーシエスがその全ての隙をことごとく無視したというものになった。そして彼は、一夏と鈴音の攻撃をゲームを楽しむかのように嬉々として避けることだけに注力していた、彼からの攻撃は牽制の意味合いのものばかりである。そう、誰がどう見ても一夏と鈴音は遊ばれているのであった。

「ああもうつ、一体なんなのよコイツは…！」

そのことは勿論一夏と鈴音両方ともに気付いている。また、この事実プライドの高い鈴音の神経を逆撫でしているのもまた事実であった。

「・・・鈴、あとエネルギーはどのくらい残ってる？」

「180つてところね」

対する一夏のエネルギーは鈴音よりも、さらに低い。雪片の仕様が響いていた。

「このままじゃ、埒が明かない。俺は次に全力を懸ける。容赦なく・・・」

だが、悪いことばかりでもない。この時、一夏の頭には一つの策が思い浮かんでいた。彼が為し得る事の出来る最大の策が。

「全力も何もその攻撃自体が当たらないじゃない」

「次は当てる」

「言い切ったわね。じゃあ、あたしも負けてられない！」

一夏の考えを察してか、鈴音はニヤリと不敵な笑みを浮かべた。その表情はとても活き活きしている。

（へえ、なにか策があるみてえだな。あんなだけ遊んでやったのに、その心意気は評価してやるよ。さて、なにを仕掛けてきやがる？）

サーシエスの表情もまた、さらに活き活きとしたもの変わる。

「一夏、どうしたらいい？」

「俺が合図をしたらアイツに向って衝撃砲を撃ってくれ。最大威力で」

「？ いいけど、当たらないわよ？」

鈴音は至極当然の疑問を返した。

（おいおい、オープンチャンネルでそんなことを話すなよ。丸聞こえだぞ。まあ、いいか。・・・だが、それじゃあさっきまでと大差ねえじゃねえか。これが策か？ 拍子抜けかよ）

二人の会話をオープンチャンネルで呆れながらも聞いていたサーシエスは、その内容に落胆の色を見せた。

「いいんだよ、当たらなくてもな・・・」

そんな2人の微妙な反応とはうって変わって一夏は自信を湛えた瞳で呟いた。

「じゃあ、早速・・・鈴！ 行」

一夏が鈴音への掛け声と共に突撃姿勢に移ろうとした瞬間、アリーナのスピーカーが轟いた。

『一夏あつ！！』

「なっ！？」

一夏は急いで、スピーカーの発信源である中継室に目を遣る。そこには、見知った顔が一人。スピーカーの声の主、篠ノ之 篁がいた。

『男なら・・・男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする！』

肩で息をしながら、箒は怒りや不安や焦燥が緋い交ぜになったような表情で捲くし立てた。大音量によるハウリングが辺りに響く。

「ああたく、うるせえなあ・・・」

サーシエスが気に食わなそうに箒のほうへと注意を向けた。単に煩かったのか、それとも内容が癪に障ったのかは分からない。その手に握られたバスターソードがライフルモードへと変わった。

（　　まずい！　）

「箒、逃げ　」

それを見た一夏は直に箒を逃がそうとするも、言ったところで間に合うわけがない。突撃姿勢に移行し加速する。アルケーの腕が上がるのが酷くゆっくりに見えた。

「鈴、やれ！！」

「わ、わかったわよ　」

一夏は続けざまに鈴へと合図を送る。グダグダな決行になるが仕方ない。最大出力のために甲龍の補佐力場展開翼が後方に広がった。そして、そのまま一夏は驚くことにその射線に入った。

「な！？　何して　」

「いいから撃て！　早く！！」

「くっ！　どうなっても知らないわよ！」



龍砲が轟き白式に莫大なエネルギーが叩きつけられる。通常ならこのまま吹き飛んでいくところだが、一夏はその瞬間『瞬間加速』を発動させていた。今の彼にできる虎の子の技を。

『瞬間加速』は簡単に分割すると、エネルギーの外部放出、その再吸収、圧縮、そして放出という四つのステップで発動される。つまり理論的には最初のステップは飛ばしても構わないこととなっているのだ、吸収するエネルギーさえあれば。さらに、『瞬間加速』の加速量は使用エネルギーに比例していた。また鈴音の衝撃砲が打ち出すものは弾丸ではない、エネルギーだ。理論の上ではこれも『瞬間加速』において利用可能ではある。

龍砲のエネルギーは莫大だ。攻撃を目的に作られているのだから当たり前だと言えるだろう。そして、『瞬間加速』の加速量は使用エネルギーに比例。もし龍砲程の莫大なエネルギーを下に発動すれば、それは通常の『瞬間加速』とは蟻と象程の差があるものになるだろう。これを一夏は期待していたのだった。

だが、これは全て理論上だけの話だ。実際はそう上手くはいかない。『瞬間加速』の発動のタイミングを誤れば、エネルギーの吸収は失敗し、龍砲の直撃を受け容易く自滅だ。だから誰もしようとは考えないだろう。一夏もそれは理解していた。けれど、だからその意表が突けると一夏は考える。これは、危険な賭けだった。

「オオオオツ!!!」

一夏が、衝撃に顔を歪める。けれど、吹き飛んでいくことはない。その手の『雪片式型』が展開され輝きを放った。一夏は加速する。龍砲の衝撃と『瞬間加速』の力により人智を超えたスピードで。

賭けは一夏の勝ちだ。その勝因ただ一つ、咄嗟のことで一夏と鈴音、彼等の呼吸は寸分狂わず合っていたということだった。

【零落白夜】・使用可能。エネルギー転換率90%オーバー！。

一夏の意識が晴れ渡る。情報を知るではなく分かるという奇妙な感覚、何十倍にも跳ね上がったように感じられる集中力、そしてなにより全身を包む力を実感していた。

（俺は・・・今度こそ、箒を、鈴を、千冬姉を、大切な人を守る！　そう決めたんだ！）

「　邪魔すんじゃないええええ！！！」

全身全霊の一撃は爆発を生んだ。

V Sサーシエス？

「・・・や、やったの？」

鈴音の眼前は、爆炎により遮られていた。赤い粉塵が花火の如く煌びやかに散っている。そこは、今しがた一夏が飛び込んでいった場所だ。

『・・・い、一夏？』

箒が不安と共に爆炎の中へ呼びかける。先刻までサーシエスによる悪意の渦中にいた彼女であったが、怪我は何処にもない。中継室がGN粒子により蹂躪されていることもなかった。砲撃は起こらなかった。

けれど、箒の呼びかけに答える声はない。あるのは、舞い散った塵が地面に当たる微かな音だけだった。

「・・・あ、がッ！　ぐッ、あ、かはッ」

「！？」

突如、そこに異音が混じる。金属と金属がぶつかりあう打撃音に、何かの生き物の呻き声のようなものが・・・。

「い、一夏！！」

その音に最悪の想定をイメージした鈴音がすぐさま叫んだ。

だが、やはり返事はない。

鈴音は、一夏に当たるという可能性も厭わずに爆炎へと龍砲を放った。煙を払うために。一夏の無事を確認したいがために。

龍砲により、煙はゴウツという音と共に掻き消える。そこには一夏の姿が・・・あった。

「がッ、あぐッ・・・」

アルケーガンダムの右腕により首を鷲づかみにされ、悶え苦しむその姿が。その身体には既にISは纏われていない。活動限界を向え、ガントレットへと戻ってしまっている。

「そ、そんな・・・」

鈴音が絶望の声をあげる。それは、一夏の苦しむ姿を見たからだではない。サーシエス、アルケーガンダムの状態を目の当たりにしたからであった。

アルケーガンダム、つまりサーシエスの姿は一夏の決死の攻撃以前となんら変わりがなかった。傷一つ見受けられな・・・いや、違う箇所はあった。サーシエスの手にGNバスターソードは握られていない。代わりにその手は一夏の首を絞めていた。

あの攻撃のとき、一夏はGNバスターソードを斬り裂いていた。武器であるそれは、ISの装甲よりも何倍も堅い。それにもかかわらず斬り裂いた一夏の攻撃は、すさまじい破壊力だったといえるだろう。だが、一夏は狙って武器を破壊した訳ではない。彼は、アルケー本体を斬り伏せる魂胆でいたのだった。あのスピードならば反応できないだろうという甘い認識の上での算段で。結果はご覧の通り、一夏の予想に反してサーシエス是对応しGNバスターソードによって防がれてしまったという訳だ。そして攻撃後の隙ができた一夏を捕らえ、今に至る。要するに、サーシエスの方が何枚も上手だ

った、一夏はそれを読み違えたということだけだった。まあ、サーシエスの実力を知らない一夏では仕方のないことだ。目の前の敵が本気でないことは分かってても、まさか実力の何分の一程度でしか発揮していないとは、とても思わないだろう。

「い、一夏を離さないよ!」

「ああ? やなことだね。こいつが俺の目的なんだよ!」

サーシエスはひどく高揚した声で鈴音に答えた。一夏の苦しむ姿が、自らの手で人を苦しめるのが余程嬉しいらしい。

「それにしても驚かせてくれたなあ! あんな無茶をやらかすとは思ってなかったぞ、ええ? 危うく墜ちるところだったじゃねえか」

「おかげで、大事な武器を無くしちまったぜ。なあ、どう落とし前つけてくれるんだよ? ああ?」

サーシエスは挑発するかのように一夏へと言葉をぶつける。

「ぐッ・・・あ」

「おっと、これ以上やると死んじまうか。たくっ面倒くせえな。まあいい落とし前は、俺を斬ろうとしてくれたその腕にしとくとするかあ」

「生きて連れてきやいいんだ、五体満足の必要はねえ。さーて、たっぷり苦痛にもがいて苦しめ、糞ガキが!」

サーシエスが空いている左手で一夏の右腕を掴み万力のように締

め上げる。そしてあらぬ方向へとゆっくり曲げ始めた。

「がああああああ！！！！」

一夏が激痛に悲鳴をあげる。サーシエスはそれにも留めずに、罪悪感を欠片も感じずに尚も曲げ続ける。

「や、やめなさいよ！！」

鈴音がそんな一夏を見ていられる筈もなく、たまらず突撃しようとする。が・・・

「邪魔すんなよ、嬢ちゃん。俺は気が立ってんだよ。こんなガキに一瞬でも冷や汗掻かされたことになあ！ 墜ちちまいなあ、ファング！！」

アルケーの腰部から10機の何かが射出される。前進翼を展開し牙と名付けられたそれらは、セシリアのブルーティアーズを遥かに凌駕する二次元的な動きで変幻自在に鈴音に接近する。

「何よこれ！？ な・・・ぐうッ！」

その動きに翻弄されつつも必死でさける鈴音だが、長くは持たずに直に小型のビームサーベルを形成したファングの数機に激突してしまう。

その身体はあっけなく地面へと墜ちていった。

「はははっ！ そこで大人しくしておきな。さて、じゃあ気を取り直して腕、もらっぜえ」

「ぐあがあああああああ！！」

一夏に抵抗する力は既がない。なすがままにされるだけだ。

「恨むならテメエの弱さと、俺と敵対することになったテメエの人生を恨むんだな」

「そうか、ならむしろ私は感謝しないとな。こんな気持ちを味わうのは久しぶりだ。この昂り・・・堪忍袋の緒が切れた。許しはしないぞ、ガンダム！！！！」

・ 漆黒の影がサーシエスへと斬りかかった。その両手の、プラズマブレイドが怒りとともに振るわれる。武器を失ったアルケーへと・

## V S サ ー シ エ ス ? ( 前 書 き )

予告の時間からかなり遅れた投稿になってしまい申しわけありません。

自分の実力を過大評価していました。書くスピード無茶苦茶遅いですorz

また、今回でpart2終わらせるとかのたまっていましたけど無理でした……。くどいと感じると思いますがもう少しお付き合いくださいませ。ではノシ



## VSサーシエス？

<????>

？ 「あれあれ？ どのだれだよ？ この束さんに断りもなく、こんなけしから・・・楽しそうなことやってるのは！」

束 「むう、なんか癪だなあ。ほんとに私がいつくん達にちょっかいだすつもりだったのに」

束 「よし、ム力つくから邪魔しよう。うんうん、ストレス溜めるのはよくないよね、そうしよう」

束 「そうと決まれば、こっちをこうして、あっちをこうして、あれをどうしてって」

束 「はい、終了！ 超速だね。さすが天才、束さん」

束 「さうで、これで、ちーちゃんたちはどうするのかな？」

<同時刻 某国某所>

？？ 「なに！？・・・システムが僕を拒絶した？」

？？ 「システムを奪取し返されたのか？ 馬鹿な！ 僕の介入を阻めるなんて・・・」

?? 「まさか!? . . . なるほどね。人間の小娘風情が勝手にしてくれる。いつか罰を与えないといけないね」

?? 「まあ、今回は仕方ないとするよ。彼なら、やってくれるだろうし、例え失敗しても次はあるさ」

?? 「来るべき対話はまだ遙か先なんだからね」

「はあああああ!!」

気合の一声と共に、カスタムフラッグが左右両の手のプラズマブレイドをサーシエスへと、一夏を掴むその腕へと振り下ろす。

「ちいッ、いきなり何だってんだ!? クソが!!」

しかし、いきなりの奇襲にもかかわらずサーシエスは、一夏をその手から放棄すること引き換えに回避を成功させていた。

サーシエスの手から解き放たれた一夏は、重力に引かれるまま地面へと落下していく。ISを失い、その身も満身創痍な彼はどうすることもできない。

だが、その落下していく一夏を初撃が失敗した隙を埋めるための後退とともにグラハムは抱き留めていた。

「一夏! 大丈夫か?」

腕の中でぐったりとしている一夏にグラハムは問いかけた。彼の腕が小刻みに震えている。眼前に突きつけられた友の傷ついた姿への悲しみや怒り、憎悪の一端がそこには現れていた。

「・・・グラ・・・ハム。悪い・・・俺じゃあ、敵わな・・・かった。また・・・大切な人を・・・守れなかった」

痛々しい程に細々とした声で一夏は答えた。その小さな声のなかには、自分の不甲斐なさを実感した悔しさと己の矜持を碎かれた悲しみが湛えられている。

「・・・いや、違うぞ一夏。いま箒は無事だ。お前が行動したから、攻撃を未然に防いだから彼女は無事だ。お前は箒を、大切な人を守れた。お前は自身の矜持を貫いたのだ。誇りを持て！」

「そう・・・か。箒は・・・無事なのか。ああ・・・よかった。俺は・・・できたんだな。大切・・・なひ、と・・・を」

グラハムの言葉に救われたように、一夏は安らかな顔でその意識を闇へと落とした。

「ああ、その通りだ。一夏、疲れただろうから少し休むといい。あとは私に任せてもらうぞ！」

気絶した一夏を地面へと静かに寝かせながら、グラハムは語りかける。その声に怒りを露にして。

直後、グラハムは反転、フラッグを変形させ、地面に横たわる一夏を背にサーシエスに突撃する。

「よくも、私の友を！！　ただでは済ましはしないぞ、ガンダムウ！」

変形をはたしたフラッグがリニアライフルを連射しながらサーシ

エスへと驚異的なスピードで迫る。

「！？ て、てめえ、何でそれを・・・くッ、行けよお、ファングー！」

サーシエスの声をキーに、アルケーの腰部からファングが射出された。迫り来るフラッグを迎え撃つ為にファングらは空中を変則的に移動しそれへと接近を試みる。  
だが・・・

「小賢しい！ そんなもの、スピードで圧倒させてもらっ！」

フラッグへと近づき、ビームを展開させそれを撃墜しようとするファングであったが、フラッグによる巧みな旋回、急変速に翻弄され攻撃は全て空を切ってしまう。

それだけではなく、グラハムの優秀な軌道予測によるリニアライフルによりファングの2基が撃墜されていた。非常に小型で尚且つセシリアのブルーティアーズ以上の機動を行うファングであるにもかかわらず、だ。怒りが、彼の能力を限界以上に、MSに乗っていたところと同等までに引き出しているのかもしれない。

「空いたぞ、そこだ！」

2基のファングが欠けたことにより空いた隙間をフラッグがすり抜けた。これで、間合いは詰まる。グラハムが得意とする接近戦へと持ち込める筈だ。

「ハッ！ 甘えんだよ。まだ、あるんだよバカがあ！ ファングー！！！」

けれど、グラハムに思い通りにさせるほどサーシェスは甘くはない。両腰部に温存しておいたファング2基を勝ち誇った笑みと共に射出した。至近距離からの攻撃、回避は不可能、そうサーシェスは思考し、勝利を確信する。

並大抵の相手になれば通用するそんな戦術を根拠にしてだが。

「小賢しいと言った！　ぐううッ！！」

「殺人的なGだな・・・、だが構ってなどいられない。人呼んで『グラハム・スペシャル』！！」

もつとも、今のグラハムはともじやないが並大抵の枠には収まらない。完全に常軌を逸していた。それを、サーシェスは理解していなかった。無理もないが、奇妙な発言をする以外は一夏と同じく唯の学生だと認識してしまっている。そのため詰めの甘い戦術を行使してしまった。

「なんだとお！？」

グラハムは、強烈なGを物ともせずにはトップスピードを維持しつつ人型へと変形しファングを往なす。そのまま、再度プラズマブレイド2対を展開して武器を持たないアルケー目掛けて振るった。

その斬撃をサーシェスはGNシールドで難なくと受け止める。プラズマブレイドとシールド、両者がぶつかり合い激しい火花が2機を彩る。

「どうした？　身持ちが堅いぞ、ガンダム！　今の私は、阿修羅すら凌駕する存在だ！！　どれほどの性能差であろうと・・・一矢は報いさせてもらう。フラッグファイターの誇りにかけて」

「・・・てめえ、なんでガンダムを知ってやがる？ それに、フラッグファイターだと？」

「おそらく、貴様と同じ境遇だと言っておこう、アリー・アル・サーシエス！」

「な！？」

剣と盾での凌ぎ合いを終え、2機の間にもた少しの距離が生まれた。

「まさかとは思ったが、よもや凶星とはな・・・」

「てめえ、何て名前だ？」

2機はその僅かな間を空けたまま、腹の探りあいを続ける。

「・・・私はグラハム・エーカーだ。かつてフラッグファイターだった男だ。今もまたそうだが」

「グラハム・・・懐かしい名前だぜ、あの有名なユニオンのトッパンかよ。・・・はははははっ！ 道理でガキにしちゃあスゲー動きする訳だ。面白くなつてきやがったなあ、最高だあ！！」

「貴様も、私と同様に戦死して気付いたらこちらにいたのか？ どうなんだ？ 詳しく聞かせてもらっぞ」

「さあてどうだろうなあ？ 最近物忘れが酷いんでね、覚えてねえよ。どうしても知りたいんだったら、俺を倒して拷問でもしてみな！！！」

「・・・そうか、いいだろう」

2機の間合いが僅かに詰まる。数瞬の間にお互いの隙を狙って見えない駆け引きが繰り広げられた。

そして、風が吹く。

「グラハム・エーカー、カスタムフラッグ行くぞ!!」

決着への最後の火蓋が斬り落とされた。

## 天災（前書き）

更新が遅くなりすみませんでした。

文化祭やら体育祭で浮かれてたんで・・・言い訳ですね、はい。

なんか謝ってばかりのような……それだけ、怠けてたんですね自分、ごめんなさい。

さて、途中で会話文と地の文との間の行数が増えてますが、読みにくいと指摘があったからです。以後はこれで行くことにします。



## 天災

アリーナの中央、中空に反転、急制動、急上下降と千変万化に疾走する影があつた。鮮血と漆黒、二つの影は時に接近し衝突、火花を咲かす。そして離れ、また近づく。漆黒が二振りの剣を手に幾度も迫り、鮮血を斬りつけ、鮮血はそれを盾にて受ける。戦況は変わることを放棄し、同じ様な光景が繰り返されていた。幾度も幾度も。

「ははっ！ どうした、どうしたあ！！ そんな生っちょろいので俺が倒せると思つてんのか？ ええ、ユニオンの元エースさんよお！」

一見、漆黒、カスタムフラッグが押しているかに見えるこの状況で、強者の余裕を湛えた声を上げたのは鮮血、アルケーガンダムであつた。先刻から防戦一方であるにもかかわらず焦りや危機感といった感情がサーシエスにはまったく存在していない。

（くっ……強い！？ 機体の性能差もあるだろうが……この男、実力も私以上だと！？）

「……だが、それでも！！」

それとは正反対に、グラハムの内心は驚愕と焦燥。いままでの幾重の必殺の斬撃、それが一つも実を結ばなかった結果だ。だが今更どうしようもない、機体の性能差がある以上、彼は自身の持てる力全てを駆使し、その限界を超え攻め続けるのみである。

フラッグがアルケーへと、もう幾度目かも分からない接近をする。

縦横斜めの斬り上げ、斬り下ろし、苛烈な突き、手を替え品を替え様々な組み合わせで両手のプラスマブレードを振るい押し迫った。

「だからあ！ 動きが、とれえんだよ。押し切られるわきゃーねえだろお！！ ちよいさー！！！」

だが、その巧みな剣戟は今回も実を結ぶことはない。サーシエスはアドバンテージの一つである機体の機動力を活かして斬撃を躲し、それが不可能なものはGNシールドで往なす。GNシールドを大きく振るい、ブレイドとかち当てた。その反動によりグラハムの右腕が大きく弾かれ一瞬、右脇腹が無防備となる。そこにサーシエスは左足による鋭い蹴りを加えた。

「ちいッ、そう易々と当たりはしないぞ、ガンダム！」

逆にグラハムは右腕の反動を押し殺すことなく利用し、僅かに後退した。サーシエスの左足が、擦れ擦れで掠める。

「残念だったな。あるんだよお、俺には取って置きのこれがない！！！」

そして、カスタムフラッグのシールドが悲鳴を上げた。

「ぐううッ！！・・・な、何だと！？ これは・・・」

衝撃により更に後退させられたグラハムの目前には、阿修羅がいた。その左腕のGNシールドを展開しビーム刃を形成、盾ではなく剣となし、両脚部のGNビームサーベルをも起動させる。その脚部によりカスタムフラッグのシールドエネルギーは削られたのだ。その姿は、グラハムですら恐怖を感じた。

「さあて、サービスはここで終いだ。次からは、こっちも行かせて貰うぜえ！　楽しませてくれるよなあ？　フラッグファイターさんよお！！」

まだ、驚愕により体勢を整えきれないグラハムとの距離をサ―シエスは無情にも一瞬で縮めた。振るわれる、腕、足。幾多の斬撃、先程までとは逆の状況。

「私が圧倒される！？　しかし、好きには！！」

グラハムもすぐさま体勢を立て直すことに成功し、同じく剣戟で迎え撃つ。二振りのプラズマブレイドを、腕を回転させ振るい攻撃の相殺を計った。

スカーレットとライトブルー、2つの閃光が激突し周囲を彩る。だがそれも僅か、鏑迫り合いは許されない。手数で劣るグラハムはその腕を止めることは出来なかった。二度三度と切り結び、互いに振り抜かれる閃光。紙一重の綱渡りだが、以前戦闘は平行線、膠着を保てていた。

「やるじゃねえか。だがな！」

不意に異変は起こる。サ―シエスは隙が出来ることも厭わずに力の限り大きく、GNシールドを振るった。躲すことのできないように、脚部による攻撃をあえて避けさせて。赤い閃光がグラハムへと迫り、当然グラハムはこれを受ける。そして異変が起こった。

「ッ！　ブレイドの出力が負けている！？　やはりISでも駄目なのか？　これでは・・・くうッ」

グラハムは右手に握られていたブレイドを脇へと抛る、その数瞬後に小規模の爆発が起こった。GNシールドのビーム刃に押し切られ、ブレイドはその柄を焼き斬られたのだった。

「無策ではこの様か、私は！・・・それでも一矢は！！」

残された利き腕のブレイドで尚も果敢にグラハムは攻める。GNシールドを振るった反動によるサーシエスの隙に乗り、その身へと叩き込むが・・・

「なんと！？これではどうにも・・・！」

「それで終えかよ？ファング！」

繰り出されたブレイドは確かにサーシエスを捕らえ、そのシールドを削っていた。だが、そのブレイドが振り切られることはなくアルケーの身に、そのシールドに触れた瞬間に弾かれていた。削られたシールドは微々たる物すぎる、これでは何回グラハムが打ち込み続けても墜とすことは適わない。GN粒子、それに強化された装甲にシールド。それを突破するにはブレイドは貧弱すぎるのだった。そして、その貧弱な、だが最後の希望は残されていたファングにより奪われる。ブレイドだけではなく、その身にもファングが突き刺さりフラッグは堕ちた。攻撃の反動で回避は出来なかった。光は絶たれた。

「惜しかったな、てめえ。もう少し、ましな機体だったらもっと楽しめてただろうによお。屑みたいなそれでよく粘ったもんだ」

「貴様、それ以上私のフラッグを愚弄するな！ただでは済まさん！！」

「へえ、そうかい。ISも失ったてめえに何ができるんだ？」

「くツ・・・だが、そんな道理、私の無理でこじ開けるだけだ！」

「そうかい。そりゃ、恐ろしいな。だったら、殺しとかねえとな  
！！」

地に堕ち、ISを失ったグラハムに、サーシエスはGNシールドをゆっくり向けた。無論、ビームを展開して。

「最後まで虚勢を張ってられるように、サクッと殺ってやるよお！  
有難く思いな。じゃあ、お別れだあ！！」

GNシールドを大きく掲げて、その後、振り下ろす。目標はグラハム・エイカー、その頭部。ISを纏わない、纏えない今の彼ではどうすることも出来ない。躲すことも、防ぐことも。そして、ISがないものがコレを受ければ・・・待つものは死のみだ。

「すまない、一夏・・・」

サーシエスの腕は振り下ろされた。そのビーム刃が容赦なくグラハムを斬り裂き蹂躪し、血飛沫が舞う・・・ことはない。

アルケーのGNシールド、そのビーム刃は何かをしっかりと捉え、その役目を果たしていた。だがグラハムは生きている。その命は存在し続けている。

「・・・まったく、なにが『すまない、一夏・・・』、だ。そんな格好をつけている暇があったら、もっと醜く、必死に足掻いてみせろ、馬鹿者」

「て、てめえは・・・ッ!？」

その何か、何者かがグラハムへと語りかけた。それは彼がよく知り、またサーシエスも知る人物だった。

「ブリュンヒルデに、そのお供がお出ましかよ。まだその時間じやねえ筈だろ？ 大将、しくじったのか？」

そう、かつてブリュンヒルデと呼ばれ、今もまたそう呼ばれる女性。ワルキューレの名を与えられた最強の人間。織斑 千冬。今はその身にかつてと同じくISを纏っていた。訓練用の打鉄だが、それでも相対する者に凄まじい威圧と気品を感じさせた。サーシエスも例外ではない。

サーシエスの意識外からの瞬間加速。これにより彼女はグラハムへと凶刃が振り下ろされる直前に間に割り入り、それを受け止めていたのだった。

「そうそう、そちらの思い通りにはさせんということだ。随分とお楽しみだったな？」

「ああ、楽しませてもらったぜ。久しぶりに、たつぷりと。こいつとあんたの弟さんのおかげでな」

「・・・どうする？ 引き続き堪能していくか？ もてなすぞ、誠心誠意、盛大にな」

サーシエスの挑発に、僅かばかり表情を陰らせ千冬は意趣返しと

ばかりに同じく挑発で返した。

（・・・何時の間にやら、ってやつだな。誰も此処には入れない手筈だったから、油断しちまったぜ）

（ざっと、10人つてとこか・・・これにブリュンヒルデが加わるとなると、笑えちまうな。どうせ、その10人も教職員の中では優秀な部類の奴らだろ）

（サシなら負けはしねえが・・・これだけを一度には、癪だが無理だな。まあ今回は失敗だな・・・となると）

周囲の状況を確認し、挑発に応じることなくサーシェスは冷静に、次への決断を下していく。

「・・・それは有りがてえとこだが、悪いが遠慮しとくぜ。あのブリュンヒルデと戦えるつてのは魅力的だが、次の機会を楽しみにさせてもらうとするよぉ！」

「では、どうするつもりだ？ 当たり前だが、逃亡などという選択肢は此処にはない」

「いいや、あるねえ！ てめえは無様に惨めに取り逃がすさ、その機体ではなあ！ フアングー！」

アルケーの脚部、スネ部分のアーマーが展開されると同時に3

基のGNドライブが唸りを上げた。異常な量の赤い粒子が周囲に更に放出される。また腰部からは現在残されたファンング全てが射出され千冬へと凶刃を向けた。

千冬はすぐさま、背後のグラハムを掴み離脱。続けざま、迫り来るファンングを難なくと斬り伏せにかかった。

「小賢しいことを、最後の悪足掻きとでもいうのか？」

間合いに侵入したファンングを全て叩き落とし、千冬はサーシェスを挑発する。常人なら、小型で機敏に動き回るそれを刀でどうにかするというのは狂気としか感じられないだろう。だが、彼女はそれを成し遂げる。一分の狂いもなく機械の様に正確に振るう。それと共にプライベートチャンネルにより周囲の僚機へと攻撃準備の指示を送った。同じ教師である山田真耶がやりそうな、慌てて口に出すなんてことはしない。プライベートチャンネルは喋る必要はないのだ。

すぐさま、返事は返ってきた。ISの通信技術はどうやら、距離に関わらずGN粒子の影響下にはおかれないらしい。既存の技術と比べ、ISとはGNドライブ同様、特殊の塊と言ってもいいのかもしれない。

「ああ、その通りだよ。別にコイツが通じるとは思っちゃいねえさ、なにせあのブリュンヒルデだ」

「だがなあ、一瞬でいいんだよお！！」



怒声、それに呼応してファンングは暴れた。先刻までは意識を引き付けようとするかのように、周囲を飛び回っていがちだったそれは、一斉に牙を剥く。四方八方、全方位からファンングは特攻をかけるのだった。

「ちい、面倒なこと・・・ッ!？」

千冬はグラハムを庇いながらであるのにも関わらず、ファンングを往なし、躲し、斬る。訓練用である筈の打鉄だが、その動きは第三世代の専用機と見紛わせる程だ。

だが、その卓越した技術に裏打ちされた、余裕の状況であるであろう千冬が見せたのは驚愕、焦り。

そして、その焦りと共に合図は出された。光が瞬いた。

（ちよつと遅えな。その距離からじゃ、どのみち当たらないだろうがよ）

「じゃあ、また会うとしようぜ。ブリュンヒルデ、織斑一夏、それにフラッグファイターさんよ」

アルケーの周囲、アリーナの観客席各所から閃光が煌いた。その数は10。実弾、ミサイル、レーザーとその内容は様々だ。だが共通することは一つ、全てはアルケーへと降り注ぐ。

・・・いや、正確には、アルケーが居た空間か。それらは、そこを通過し地面へと降り注いだのだった。

その、ほんの少し前、サーシエスは発動していた。一夏や千冬と

同じく、ISでしか出来ない、アレを。

『瞬間加速』、ISを身に纏い、その技能があれば誰でも行えるもの。エネルギーを大量に消費し異常な加速を行うだけのもの。そして、そのエネルギーが多大なほど、それは増す。

『GNドライブ』、重粒子を質量崩壊させることによりエネルギーを取り出す。それは今の人類にとって未知のエネルギーにほかない。そのエネルギーは莫大、原子力さえも凌駕しかねる。

この二つの特殊が掛け合わされた。GNドライブ、その莫大な熱量、GN粒子による重力軽減、それを抛り代とした瞬間加速。それは光に迫るほど・・・

まばたきの内に、アルケーは視界から消えうせた。GN粒子でリーダーは利かない、追うすべはない。

嵐は、身勝手に、唐突に去った。ただそれだけ、多くの傷跡を残しただけ、天災のように。

## 天災（後書き）

読了お疲れ様です。ありがとうございました。

我ながらに表現がくどいし、厨二くさいですね。

だが、安心してくれ。次回からは会話文だけでもどるぞ！  
ではノシ

## 嵐の後に

<ISS学園、保健室>

一夏 「うッ………?」

一夏 「此処は……?」

一夏 (ええと、どうなったんだ? 俺の攻撃が失敗して、グラハムに助けられて、それから　!!)

千冬 「気がついたか」シャツ

一夏 「ち、千冬姉! ぐ、グラハムはどうなったんだ? あのISSは? 倒せたの　ッ!」

千冬 「落ち着け。体に致命的な損傷はないが、全身に酷い打撲がある。暫くは地獄になるだろうから覚悟しておけ」

一夏 「そ、それよりグラハムは? 箒は? 鈴は?」

千冬 「安心しろ。全員、お前よりは軽症、ピンピンしている筈だ」

一夏 「そ、そうか。はあ……」

千冬 「少なくとも体はな……」ボソッ

一夏 「え？ そ」

千冬 「衝撃砲の最大出力を背中から受けたんだぞ、お前は。しかも、ISの絶対防御をカットしたな？」

千冬 「拳句の果てには、ISが強制解除されるまで殴られて、よく死ななかったものだ。人の心配をする前にその体の心配をしろ」

一夏 「う・・・」

千冬 「まあ、何にせよ無事でよかった。家族に目の前で死なれるなんて悪い冗談が過ぎるからな」

一夏 「千冬姉」

千冬 「うん？ なんだ？」

一夏 「いや、その・・・心配かけて、ごめん」

千冬 「フッフ、心配などしてないさ。お前はそう簡単には死なない。なにせ、私の弟だからな」

千冬 「では、私は後片付けがあるので仕事に戻る。お前も、少し休んだら部屋に戻っていいぞ」コツコツ、ガチャ

ガチャ、コツコツ

第 「あー、ゴホンゴホン！」ジャッ

一夏 「・・・よつ第」

第 「う、うむ」

第 「あ、あのだなっ。今日の戦いだがつ」

一夏 「ん？ そ、そういえばアイツはどうなったんだ？ あの赤いIS、倒せたのか？ 第！」

第 「い、いや、グラハムも奮闘したが駄目だった……。その後、後に先生方も突入したが、決着したと思った矢先に逃げられた」

一夏 「そうか……。一体何者だったんだ？ あの野郎は」

第 「わからない。相手の素性、所属共に不明だと千冬さんは言っていた。だが目的は、はっきりしている。一夏、お前だぞ」

一夏 「ああ、わかってる。だけど何で俺なんかを？」

第 「何を分かりきったことを言っているんだ？ 世界でほぼ唯一、男でISが動かせる。これだけで、目標とするには充分な理由だろう」

第 「その特別である一夏を調べれば、自分達も特別になれると考える連中が居てもおかしくない。いや、五万といるだろうな。こういうことが予想されることもあるから、IS学園に無理にでも入学させられたんだぞ？」

一夏 「そういえば黒服の人達も、君を保護だとか、どうとか言ってたな、確か」

第 「そういうことだ。お前は自分の価値を認識しなせ！」

第 「まあ、それでも今回は異常すぎる。いくらなんでも学園に直接乗り込んでくるなんて・・・」

一夏 「え？ どうしてだ？」

第 「IS学園といえば表面上はただの教育機関だが、世界中でこの軍施設や研究所よりもISが集まっている場所だぞ？ 警備のレベルや、有事の時の防衛システムなんかも実は桁違いだ。そこに侵入するなんて、普通は考えない。実行するなんて尚更だ」

一夏 「でも、今回はあんなに簡単に」

第 「それだけ、相手が異常だったんだ。要塞レベルの此处に侵入し、暴れ、難なく去っていくほどに・・・」

第 「だ、だからこそ、お前は何を考えているんだ！」

一夏 「へっ？」

第 「無事だったからいいようなものの・・・あのような事故、先生方に任せておけばいいだろう！ 過剰な自信は身を滅ぼすという言葉を知らんのか！？」

一夏 「も、もしかして心配してくれたのか？」

第 「し、していない！ 誰がお前の心配などするものか！」

第 「と、とにかくだ！ 今後こんな事態があつた時の為に、訓

練はこれからも続けていくぞ！ いいな？」

一夏 「あ、ああ、わかったよ」

箒 「わかればいい。・・・では、私は先に部屋に戻るぞ」

箒 「・・・。一夏」

一夏 「ん？」

箒 「その、だな。戦っているお前は・・・か、かか、かつ」

箒 「格好良かったぞ」ボソ

一夏 「は？」

箒 「ッ！ な、何でもない」

箒 「で、ではな！」ガチャ

一夏 「ふう・・・。ん・・・、急に眠気が」

< I S 学園、グラハムの部屋 >

千冬 「グラハム、話がある入るぞ」コンコン、ガチャ

グラ 「なにか用か？ 千冬女史。正直、今は一人にしてくれると有難いのだな」



千冬 「はあ、何を気落ちしているんだ？ お前は」

グラ 「別に気を落としてはいいない。ただ、自分自身について考えていただけだ。フラッグの、自身の矜持とプライドを守れなかった自分を」

千冬 「・・・それを、気落ちしていると言っんだ」

千冬 「まあ、いい。それよりもグラハム、お前には私に付いてきて貰っぞ」

グラ 「む？ 構わないが、何処へ？」

千冬 「秘密だ、着いてからのお楽しみとでもしておくかな」

グラ 「？」

千冬 「余計なことは気にせずに付いてくればいい。行くぞ」

グラ 「あ、ああ」

\*\*\*\*\*

<ISS学園、地下>

千冬 「着いたな。グラハム、目隠しを取ってもいいぞ」

グラ 「ん・・・しかし、随分な警戒だな。わざわざ、こんな物を使うなんて」

千冬 「それだけ、この学園には裏があるということだ」

グラ 「此処は何だ？ 研究所といった言葉がピッタリと当てはまりそうなのだが」

千冬 「さあな、お前の想像に任せる。さて、長いのは好みじゃない。単刀直入でいこう」ピッ！

<< どうした？ 身持ちが堅いぞ、ガンダム！ >>

<<・・・てめえ、なんでガンダムを知ってやがる？ >>

<< おそらく、貴様と同じ境遇だと言っておこう、アリ  
ー・アル・サーシェス！>>

<< グラハム・・・懐かしい名前だぜ、あの有名なユニ  
オンの >>

<< 貴様も、私と同様に戦死して気付いたらこちらに  
いたのか？ >>

グラ 「これは・・・」

千冬 「聞いて分かる通りに、先の戦闘での、お前と侵入者との会  
話の記録だ」

千冬 「言いたいことは分かっているな？」

グラ 「・・・ああ」

グラ 「拘束でも、尋問でも好きにしてくれて構わない。無論、知っていることを全て話し、抵抗もしない。だが、言葉では信用できないだろうから、そうしてくれ」

千冬 「・・・ハア、分かっているではないか」

千冬 「お前には勿論、あの侵入者、アリー・アル・サーシェスとやらについて答えてもらおう。だが、拘束も尋問もなしだ」

グラ 「いいのか？ 私は一応は素性が知れない人物なんだぞ？」

千冬 「甘く見ないで貰おうか？ これまでの時間があれば、お前が信用に足るか、足りないかなど、容易に判断できる」

千冬 「そして私はキナ臭い奴を視界においておくほど、能天気ではないと自負しているんだがな」

グラ 「・・・感謝する」

千冬 「フツ、馬鹿者・・・ああ、だがその前に一つ見せたい物があつたな」ピツ、ブシュウ！

千冬 「・・・これだ」

グラ 「こ、これは!？」

千冬 「これが何か、説明は必要か？」

グラ 「これは！ サイズはIS並みだが・・・間違いない『GNドライブ』！？」

千冬 「やはり要らないみたいだな」

グラ 「な、何故これが此処に？ お、教えてくれ！」

千冬 「落ち着け。それはだな」

東 「ハイ、ハイ！ それは私が説明するよん！」プシュー

グラ 「ぬお！？」

千冬 「東、いきなり出てくるな」

グラ 「・・・東？ ・・・ッ！？ 東ということは、もしやISの開発者、篠ノ野 東博士か？」

東 「そう、私が天才の東さんなのだよ。はろー」

グラ 「は、ハロー」

東 「おお、やっぱり発音いいね！ さすが外人さん」

グラ 「はあ」

グラ （カタギリ以上の変わり者だな・・・私も大概だが、やり辛

い)

束 「君が噂の2人目の男性IS搭乗者だね。ふふー、話を聞く限りかなり興味深いよね、君は。よし、覚えたよ!」

千冬 (束が他人に興味を示すなんて、珍しいな・・・)

グラ 「あ、ありがとうございます」

グラ 「で、そろそろ、この『GNDライブ』について説明して頂きたいのですが?」

束 「ああ、それ? それは、ちーちゃんからのデータを基に私が開発したものだよ。sonだけ」

グラ 「か、開発!??」

束 「そ」

グラ 「で、データというのは?」

束 「この間の戦闘のデータとか、あのISが残していった遺留物のデータとかだよ」

グラ 「・・・」

グラ (開発と言ったって、まだ3日も経っていないぞ! それに、その程度のデータで?)

グラ (篠ノ野 束、IS開発者は伊達ではない! ということか・

・・)

千冬 「まあ、信じられないだろうが、そういうことだ。グラハム、ISを出せ」

束 （まあ、本当のところは、あの時にクラッキング元からデータを盗んだおかげなんだけどね。ぬう、まだまだ興味深いデータがたくさんあったのにこれしか抜けなかったよ。プロテクト硬すぎ、私が手こずるなんてね）

グラ 「了解したが、何故？」

千冬 「勿論、これを取り付けるために決まっているだろう」

グラ 「い、いいのか!？」

千冬 「これを知り、使うに相応しいのはお前しかいないと私が判断した」

千冬 「お前には、この間の借りを返してもらわないといけないんだ。一夏の分もな」

千冬 「この期待、無碍にしてくれるなよ？」

グラ 「・・・の、「望むところだ」と言わせてもらおう!」

千冬 「よし。束、頼むぞ」

束 「しょうがないにゃあ。どれどれ？ これをこうして、ああして、うりゃ」



## 嵐の後に（後書き）

はい、大分無理矢理ですがカスタムフラッグからカスタムフラッグ？、またの名をGNフラッグへとパワーアップすることになりました。

ただ、原作の設定通りにサーベルだけで行くか、ロボット魂みたいにライフルを着けるかで悩んでいます。

更新が相変わらず遅いですがご了承ください、ではノシ



## アニメじゃない

<アリーナ>

ガゴッガン！ キュイイーン！！

グラ 「はあああああ！！」 バシユウ、ブウン！

グラ （このピーキーな操作性、身を刺すようなG。変わらないな、あの時と。何の因果か・・・おもしろい）

グラ （だが、全てという訳ではないか。この粒子の色、夕焼けのような鮮やかなこれは・・・）

千冬 <<機体の調子はどうだ？ グラム。GNドライブは良好か？>>

グラ 「なかなかのじゃじゃ馬だが、問題はない。GNドライブも今のところは高水準の出力で安定しているぞ」

千冬 <<まあ、突貫での取り付けだったからな、機体に歪みが出るのは仕方ないところだ。そこは技量でなんとかしろ>>

グラ 「了解した、元よりそのつもりだ」

千冬 <<フッ、そうか。さて、必要はないかもしれないが一応、機体の改修点について説明しておくぞ>>

グラ 「頼む」

千冬 <<まず大きな改修点は一つだ、もちろんGNドライブを搭載したことになる。それにより、出力、運用可能時間、機動・運動性等が飛躍的に向上した。特に機動性は変形時のフラッグをも凌駕する程だ>>

千冬 <<が、それに伴い搭乗者への負担も増加した。以後注意しろ。また、無理な設置のため変形機構は省略されているからな>>

千冬 <<次に武装だが、ドライブ搭載による拡張領域の消費により固定武装のバルカンとビームサーベルのみとなる。なに、以前にライフルは不要だと言っていたから問題はないだろう？>>

グラ 「もちろんだ。最高の剣があれば、それで充分。何であろうと斬り捨ててみせる」

千冬 <<よし。後は細かい変更点が幾つかだ。センサー類の強化に、両脚部にスラスター兼兆弾を誘発させることにより被害を軽減するディフェンスロッドを搭載した。また背部にあった翼は撤去されている>>

千冬 <<とまあ、ざっとこんなところだな。グラハム、なにか質問はあるか？>>

グラ 「東博士は、そこに？」

千冬 <<ああ、居るぞ>>

グラ 「では、代わってもらえないだろうか？」

千冬 <<わかった。少し待て>>

東 <<・・・ハイハイ！ 東さんに何の用かな？>>

グラ 「GNドライブについてなのですが・・・この粒子には毒性があるのでは？」

東 <<・・・よく知ってるねえ、やっぱり面白いよ、君>>

グラ 「やはり毒性があるのですか？ この色でも」

東 <<うん、大丈夫だよ。あの侵入者が残していったそれには確かに細胞に異常を発生させる性質があったけれど、私のはちゃんと対策済みだからさ>>

グラ 「そうですか。それなら安心して使えます」

東 <<うん、じゃあ頑張って使いこなしてよ。データの方も期待しているからさ>>

東 <<じゃあ、お話お終い！ バイバイ！>>

グラ (ふう、よかった。最大の懸念はなくなったか・・・戦争でなら気にせず使えたが、今の状況ではな)

グラ (今の私は破壊だけでなく、守らなくてはならない、自分以外も・・・一番、あの時と違うのはこれなのかもな)

< I S 学園地下 >

千冬 「・・・やはり俄かには信じがたい話だな」

束 「うんうん、荒唐無稽もいいところだね！ 面白いなあ」

グラ 「うつ・・・確かに未だに自分も信じられない気持ちはあるのだが、事実としか・・・」

千冬 「そうだな嘘みたいな話だが、あの侵入者に、GNドライブ、これらがあつては信じるしかないか」

束 「まあ、そうだよな。じゃあ、その話を纏めてみると・・・」

束 「グラハム・エーカーは今よりも300年以上未来の世界の軍人で、その世界にはMSという巨大な人型機動兵器がある。そして君はそのエースパイロットだった」

束 「また、その世界では軌道エレベーターによる太陽光発電で資源問題が一応には解決しているものの歪みを大量に抱え込んでおり、今と変わらず戦争は絶えなかったと」

束 「そんな時に現れたのが、GNドライブという未知のテクノロジーを搭載したMS、『ガンダム』を保有する私設武装組織『ソレスタルビーイング』」

束 「彼等の理想は戦争の根絶で、その為の武力介入を開始。圧倒的性能をもった『ガンダム』はそれを実行でき、それに対抗する

ために結果的に世界は纏まり、変わっていった。君も、軍人として、個人的思想も交えて『ガンダム』と対立し、戦い、変わっていった」

東 「地球連邦の樹立、独立治安維持部隊『アロウズ』の発足、暴走。その非人道的行為を止めるためにも『ガンダム』は介入。『アロウズ』を裏で牛耳るイノベーターとの戦いに発展していったんだね」

東 「結果はイノベーターの敗北、『アロウズ』は解体され、新たな地球連邦政府が発足して世界は緩やかだけど確実にいい方向へと変わっていった・・・筈だったんだけど」

東 「イノベーターとの戦いの僅か数年後に、未知の地球外変異性金属体『E.L.S』が飛来、地球連邦の全戦力と『ソレスタルビーイング』をも参加する、まさしく人類の存亡を賭けた戦争が繰り広げられてしまった。もちろん君も参加し、奮闘するも戦死をしてしまい、この戦争の結果は不明と」

東 「で、気付いたらこの時代のI.S学園に倒れていたんだね。しかも、若返って」

千冬 「・・・あ、改めて纏めてみると本当にアニメの世界だな」

グラ 「・・・だが、私の中では事実なんだ。この先、この世界で起こるとは限らないが」

東 「うーん、こんだけぶっ飛んだ世界になるとは思えないし、どこか別の平行世界の未来かもねえ。で、君はその住人ってわけだ！」

束 「常識的に考えたらありえないよね。平行世界の存在自体がフィクションでしか考えられてないし、ましてやそこから移動してくるなんて」

束 「ん？・・・もしかしたら、アレかもしれないね。輪廻転生の類とか。物質的に移動したんじゃないくて、記憶的、精神的に別の肉体に宿ったのかも」

束 「いや、好奇心がこれでもかってくらい撥られるよね！ぜひ調べなくちゃ！！」

千冬 「まあ、そこらへんは頼むぞ。束」

グラ 「束博士。私からも、お願いしたい」

束 「オツケ、意地でも説明してみせるよん！」

千冬 「で、それに関連してだがグラハム、お前は何を望む？」

グラ 「む？ 望むとは？」

千冬 「戻りたいと思っているんじゃないのか？ 元の世界に。その方法を模索したりはしないのか？」

グラ 「・・・確かに、未練はある」

グラ 「当初は自分もIS学園で過ごしながら、何故此处に來たのか、どうすれば帰れるのかを考えようと思った」

グラ 「だが、もし帰れたらと仮定すると・・・私は戦死した身だ。

死者が蘇るなど、許されないだろう。そういう意味で私の居場所は、あそこには既がない」

グラ 「それに、私はあの世界と離別する決意を持って戦死したのだ。いまさら、僅かな未練で帰ろうとは思わなくなったださ」

グラ 「まあ、何故此处に来たのか？ 『ELS』との戦いがどう決着したのかだけは是非にも知りたいところだな」

千冬 「そうか。いいんだな？」

グラ 「ああ。何の因果かこうして此处に居られる以上、私は此处でこれから生きていくつもりだ。・・・神からの余生の贈り物と考えてね」

千冬 「わかった。お前が決めたのなら何も言うことはない」

グラ 「心遣い感謝する」

千冬 「別に当たり前のことだ。わざわざ、礼を言うな」

千冬 「・・・ところで、お前の話からすると実質的な年齢は、もしかして私よりも上になるのか？」

グラ 「もちろん。千冬女史の詳しい年齢は知らないが、せいぜい20代前半だろう？ 私が最後の戦いに参加した時は34だからな。今も実質的には34になるか」

千冬 「・・・そ、そうか」

千冬 「あゝゴホン。じゃあ次は、あの侵入者、アリー・アル・サ  
ーシェスについて聞かせてくれ」

グラ 「・・・すまないが私も面識がある訳ではないんだ」

グラ 「だから詳しい素性や経歴も知らない」

千冬 「分かった。なら、まず始めに一応聞いておくが、奴は男だ  
よな？」

グラ 「ああ、勿論そうだが？」

千冬 「なら何故ISを？」

グラ 「そ、それは・・・そういえば何故だ？」

千冬 「いや、聞き返されてもな。束！」

束 「うゝん、調べてないから唯の予想になるけど、向こうから  
来た人は男でもISが使えるのかもしれないね。遺伝子の構造とか  
がこっちの人間とは少し違うのかも」

グラ 「それか、私が若返ったのと似たように、性別が逆転したか  
だろうか？ 想像したくもないが」

千冬 「なるほどな。それで他には？」

グラ 「他に知っていることといえば、イノベイターの直属で『ソ  
レスタルビーイング』と戦った傭兵だということぐらいになる」



グラ 「そして、彼はイノベーターとの最終決戦時に、ガンダムと交戦、戦死した筈なのだ」

グラ 「恐らく、私と同様にしてだろうが……一つ気掛かりがある」

千冬 「何だ？」

グラ 「……あの紅いIS、それがかつて彼が乗っていたMSに酷似しているんだ。外見上では同一と言っていいほどに」

グラ 「そして性能も同じかそれ以上だと思う。GNドライブに、フアング、どれもこちらにはない筈の物がサイズは違えどそのまま搭載されている」

千冬 「何が言いたい？」

グラ 「なぜ奴がガンダムを、GNドライブを搭載したISを有しているのか？ それが不思議でならない」

グラ 「同一のカラーリングや、面影がある程度なら不思議ではないんだ。外見がまったく同じなものも百歩譲っていいでしょう。それは、こちらのISをサーシエスが改造すれば説明がつく」

グラ 「だが性能は……GNドライブやフアングは、そうはいかない。あんなもの、いくらMSの、元の世界の知識や記憶があつても1人では勿論、もし、こちらの技術者と手を組めたとしても作れるものじゃない」

グラ 「それに傭兵が、そんな知識を持っているとも考えられない。

GNDドライブは、私達の世界でも勿論機密事項だ。まさか束博士のように独自に開発したなんて冗談はないだろう」

束 「そうだね、それはありえないよ。実は私も開発したとか言いつつ設計図通りに組み立てただけみたいなもんだしね！」

グ・千「・・・は？」

束 「ん？」

千冬 「・・・束、どういうことだ？」

束 「いや、『開発した！』なんて格好付けたけど実は根本の重要なデータは殆ど他所からぶっこ抜いて来たんだよね。見栄は張るもんじゃないね、恥ずかしくなってきたよ！」

グラ 「ど、どこから!？」

束 「ほら！あの襲撃のとき、ここのシステムが乗っ取られたでしょ？相手が此处に意識を向けてる間に逆に侵入してやったんだよ!」

束 「それが予想以上のセキュリティの硬さでさ、流石の束さんでもGNDドライブ（これ）のデータしか持ち出せなかったよ。まあ、相手がその守りに驕ってたおかげで発見されるのには余裕があったんだけどね」

束 「でも、惜しいことしたなあ。GNDドライブ（これ）以外にも色々面白そうなデータがあったし、これに関連したのも『ツインドライブ』とか『トランザムシステム』とかいかにものがあ

ったのになあ。タイトルぐらいしか見れなかった」ハア

千冬 「・・・東、何故リアルタイムでそんなことを知っていたんだ？」

東 「へ！？・・・いや、突然キュピーン！と来たんだよ？」  
（お宅の弟さんを、あのISよろしく襲撃しようとした様子伺ったなんて言えないよ・・・殺されるね、ガチで）

千冬 「ハア、なんで疑問系なんだ・・・まあいい。で、お前の言ってることは本当なんだな？」

東 「うん、もちろんだよ、ちーちゃん！ 黙っててゴメンね？」

千冬 「まあ今回は許してやる。そのかわり、次はないからな？  
・・・おい、グラハム」

グラ 「・・・ハッ！」

グラ 「・・・すまない呆けていた。それで？」

千冬 「聞き覚えはあるか？ この『ツインドライブ』と『トランザムシステム』とやらは？」

グラ （『ツインドライブ』・・・少年のあの二個付きのことか？  
『トランザムシステム』は言わずもがなだな）

グラ 「ああ。どちらとも向こうにあった技術だと思う」

グラ 「しかし、このデータや他の兵器のデータまであったとなる

と・・・」

千冬 「確定だな。奴には、奴以上に向こうの知識をもった協力者が居る」

グラ 「察しがよくて助かる」

千冬 「だが、だとすると誰だ？ 心当たりのある人物を知っているか？」

グラ 「確証はないが、おそらくイノベーターの内の誰かだろう」

千冬 「イノベーターというと、サーシエスの雇い主になるか？」

グラ 「そうだ。『ツインドライブ』や『トランザム』の情報は当時、奴らか『ソレスタルビーング』ぐらいしか知らなかった」

グラ 「そして奴との関係が深いのはイノベーターだ。協力していても不思議はない」

千冬 「そうか。だが、そうだと何故だ？」

グラ 「む？」

千冬 「なぜ奴らは襲撃を、一夏を狙ったんだ？」

グラ 「・・・分からない」

グラ 「なにか独自の目的があるのか・・・、単純に男でISを操れる一夏に興味があるのか」

千冬 「そうか。まあ、なんにしても今は警戒する以外にできることはないか」

グラ 「歯痒いが、そうだな・・・」

束 「そうだねえ、侵入したとはいえ居場所までは分からなかったしねえ」

グ千束 「・・・・・・・・」

千冬 「・・・ハア、仕方のないことをあれこれ考えても意味がない、切り替えるぞ！」

グラ 「ああ、その通りだな」

千冬 「という訳で、お前の部屋はこれから一夏と同室になるからな」

グラ 「な、何!？」

千冬 「次の襲撃に備えてだ、我慢してくれ。お前には悪いが、もしもの時は一夏達を頼むぞ」

グラ 「ああ、なんだそんなことなら・・・『達』？」

千冬 「おっと、これも言い忘れていたな。今度からはお前は3人部屋になる。転校してきた者が居るんだ。しかも」

千冬 「男のな」



## アニメじゃない（後書き）

テストや、修学旅行やらでバタバタしていて投稿ができなくてすいませんでした。

でも次回でようやくお待ちかねのあのキャラたちを登場させられそうですよ！

次回は日曜日になります。では、ノシ

爆発しないかなあ

<時間は少々遡り、保健室>

「・・・・・・・・」

一夏（・・・・・・・・ん？ 人の気配？ また俺眠ってたのか・・・）

鈴 「一夏・・・・・・・・」

一夏（ん、頬がこそばゆいな。誰だ？）

一夏 「んう、って鈴？」

鈴 「っ！？」

一夏 「なにしてんの、お前。そんな顔近づけて、あと3センチぐらいで鼻ぶつかるぞ」

鈴 「おっ、お、おっ、起きてたの！？」

一夏 「お前の声で起きたんだよ。で、どうした？ 何をそんなに焦ってるんだ？」

鈴 「あ、焦ってるわけじゃない！ 勝手なこと言わないでよ馬鹿！」



一夏 (どう見ても焦ってます。本当にありがとございました)

一夏 「あ、そういえば試合、無効だったな」

鈴 「え？ ああ、まあ、そりやそうでしょうね・・・」

一夏 「あ！」

鈴 「な、なに？」

一夏 「勝負の結果ってどうする？ 次の再試合って決まってないんだよね？」

鈴 「そのことなら、別にもういいわよ」

一夏 「え？ なんで？」

鈴 「い、いいからいいのよ！」

一夏 「鈴」

鈴 「なによ」

一夏 「・・・その、なんだ、わ、悪かったよ。色々、すまん」

鈴 「ま、まあ、あたしもムキになってたし・・・。いいわよ、もう」

一夏 「ああ！ 思い出した」

一夏 「あの約束って、正確には『料理が上達したら、毎日あたしの酢豚を食べてくれる?』だったよな。で、どうよ? 上達したか?」

鈴 「え、あ、うう・・・」

一夏 「なあ、ふと思ったんだが、その約束って違う意味なのか? 俺はてつきり飯を奢ってくれるんだとばかり思っていたけど」

鈴 「ち、違わない! 違わないわよ!? だ、誰かに食べてもらったら料理つて上達するじゃない!? だから、そうだから!」

一夏 「だよな。いや、もしかしたら『毎日味噌汁を』の例のアレかと思っただけだよ。そんな訳ないよな。恥ずかしい勘違いしちゃたな」

鈴 「・・・・・・」

一夏 「鈴?」

鈴 「へえっ!? そ、そうよ! 私がそんな恥ずかしいこと言わないじゃない!? あは、あはははは・・・はあ」

一夏 「なあ、鈴」

鈴 「ん、なに?」

一夏 「今度、どっか遊びに行かないか? 勝負とか関係なくさ」

鈴 「え!? それって、そのデー」

一夏 「五反田も誘って、中学の時みたいにな三人で。 あのところ  
みに騒ごうぜ」

鈴 「……………」

鈴 「……行かない」

一夏 「そ、そうか」

鈴 「で、でも……あ、あんたと二人つきりっていうなら行  
てあげても」

一夏 「ん？ 五反田のこと実は苦手だったのか？」

鈴 「そうじゃないけど……」

一夏 「まあ、そうだな。勝負の時も二人でって話だったし、そう  
するか」

鈴 「ほ、本当！？」

一夏 「ああ」

鈴 「言ったわね！ よし、怪我が治ったら空いてる日教えなさ  
いよ。予定立てとくから。約束だからね！」

一夏 「わかったよ」

鈴 「じゃ、じゃあ、もう行くことにするわ。しっかりと休みな

さいよ!」ダッ!

鈴 (やった、やったわよ、グラハム! こ、これでやっと一夏と、デ、デートが・・・)

一夏 「まったく、騒がしいな相変わらず。ま、おかげでこっちま  
で気分が晴れたけどさ」

この数日後、俺は無事体調が快方に向かい退院できた。そして部屋に戻るなり、箒と喧嘩したり、チャーハン食ったり、部屋が別になることになったりだの普段通り、いやそれ以上の騒がしさに包まれた。拳句の果てには、来月の学年別個人トーナメントに箒が優勝してきたら付き合えと言って来るではないか。もう、何が何やら分からないが、そんな感じで宣戦布告された俺だったのだ。

p a r t 2 e n d

## 高まる期待

< I S 学園一夏自室前 >

一夏 「あー……手がダルイ、たくつ弾の奴、ムキになりやがって」  
ガチャ

グラ 「ん？ おお、帰ってきたな、一夏。こんな時間まで、どうしてたんだ？」

一夏 「ただいま。弾の奴とゲーセン行ってさ、そこで延々ホツケー対決。今日で俺の連勝数は十六まで伸びたよ」

一夏 （というか弾の奴、あれだけやって全敗、しかもほぼ自殺点ってどうなんだ……）

グラ 「弾？」

一夏 「ああ、俺の中学の友達でさ、五反田 弾っていう奴がいるんだよ。そうだ！ 今度グラハムも一緒にゲーセン行こうぜ？ そ

の時に弾も紹介するからさ」

グラ 「それはいいな。楽しみにさせてもらおうとするかな」

一夏 「おう！」

一夏 「ところでさあ、もうすぐになっちまったよな、アレ。今月だぜ？」

グラ 「アレ？」

一夏 「そうアレだよ！ 学年別個人トーナメント。忘れてないよな？」

グラ 「ああ、そのことか。忘れるはずがないだろう！ 今もまた、その日を恋焦がれている私が――！」

一夏 「そう言うと思ったぜ、……… 負けないからな、グラハム」

グラ 「いい心意気だ。『望むところだ』と言わせてもらおう！」

「グ……………」

一夏 「…………と、それにしても、やっぱりこの部屋、広すぎないか？」

一夏 「筈が別の部屋に移動したと思ったら俺も移動。グラハムと一緒にになったのは良かったけどさ、気使わないですむし。でも前の部屋でよかったんじゃない……。ベッドなんか3つもあるぜ？」

グラ 「まあ、すぐに慣れるさ。……………それどころか窮屈に感じるかもな」

一夏 「？」

グラ （千冬の言っていた転校生……………か、しかも男の……）

コンコン

鈴 「一夏、居る？」

セシ 「グラハムさん、いらっしゃって？」

一夏 「おう。どうした？ 2人とも」ガチャ

グラ （…一体どんな人物なのか、気になって仕方がないな…）

鈴 「いや、夕食一緒にどうかなくと思ってさ。ね、セシリア？」

セシ 「そ、そうですね。お二人とも夕食はまだでしょう？ なら是非私達と……」

一夏 「おお、丁度いいな。俺もそろそろ飯にしようかと思ってたんだ」

グラ （…明日にも到着するとの話だったか。よもや私と同じ、なんてことは……）

鈴 「なら決まりね！ さあ早くいくわよ」

セシ 「ちょっと鈴さん！ まだグラハムさんが」

一夏 「そうだぞ、鈴、落ち着け。ああ、でもグラハムはもう食っちまったかな」



グラ（それはないとしても、私を抜いて世界で2人目の男性IS  
操縦者か……そして、僥倖にもトーナ）

一夏「おい、グラハム！」

グラ「む？　なんだ？」クルッ

一夏「鈴とセシリアが夕飯食おうだって。俺は行くつもりだけど  
どうする？」

グラ「ああ、私もまだだったな。同行させてもらおう」スクッ

一夏「よし。じゃあ行こうぜ！」

セシ「早く行きましょう、グラハムさん！」グイッ

グラ「セ、セシリアそんなに引つ張るな」

セシ「〜」

グラ（フツ、まったく。……それにしても、間近に迫ったトーナメント。これ程おあつらえ向きの舞台もないぞ。世界で2人目の男）

グラ（その実力とやらを、存分に見せ、感じさせてもらいたいものだ……）

## 転校生はフロンド貴公子

< I S 学園 1 年 1 組 >

真耶 「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！ しかも二名です！」

「え……」

「「「えええええっ！？」「」」

一夏 （凄い驚き様だな皆、まあ俺もだけど。というか、なんでもちのクラス？ 普通、分散させるもんじゃないのか？）

グラ （ほう、転校生は 2 人も居たのか。面白い……）

転 1 「失礼します」ガラッ

転 2 「……………」

転「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いと思いますが、皆さんよろしく願います」

「お、男……？」

シャル「はい。こちらに僕と同じ境遇の方達がいると聞いて本国より転入を」

「きゃ……」

一夏（く、来るぞ……！）

シャル「はい？」

「「「きゃああああああ　　ッ！」「」「」

グラ「……………フッ、私の負けだな。こ、鼓膜が耐え切れんとは」

シャル「……………」

一夏（一体何処からコレを出してるんだ……。というより平気なのかよ！？アレか、自分の毒で死ぬフグはいないってことか？）

ク女「男子！ 前代未聞の3人目の男子！」

ク女2「しかもうちのクラス！ こんなに嬉しいことはない……」

ク女3「美形！ 守って欲しい織斑君やグラハム君とは違う守ってあげたい系！」

ク女4「ユニバアアアス！」

千冬「あー、騒ぐな。静かにしろ」

真耶「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから！」

転2「……………」

グラ（ふむ……、なかなかどうして……）

千冬「……挨拶をしろ、ラウラ」

ラウラ「はい、教官」

千冬「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も唯の一生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

ラウラ「了解しました」

ラウラ「……ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

真耶「……あ、あの、以上……ですか？」

ラウラ「以じよ……………」

一夏（ん？）

ラウラ「貴様が　！」

パシインツ！

グラ「なんと！？」

ラウラ「……………」

一夏「…………へ？」

ラウラ「…私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか！」

一夏「い、いきなり何しやがる！」

ラウラ「ふん…………」スタスタ

グラ（一体、一夏と彼女に何があったというのだ？　あの凍てついていた目は…）

千冬「あー、……ゴホンゴホン！ ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は2組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

一夏（まったく、何なんだよあの野郎！ ……野郎じゃないか。クソ、腹立つけど今は出て行かないと）

千冬「おい、織斑、グラハム。デュノアの面倒を見てやれよ。同じ男子だろう」

シャル「えっと、織斑君に、グラハム君だね？ 初めまして。僕は」

一夏「ああ、いいからいいから」

シャル「え？」

グラ「そうだな。まずは何より逃そ…移動が先決だ。女子が着替え始めるからな。……………それに来る」

シャル「え、何が？」



一夏 「いいから早く行こう。とりあえず男子は空いてるアリーナ更衣室で着替え。これから実習のたびにこの移動だから、早めに慣れてくれ」

グラ 「これはなかなか辛いぞ……………慣れるというより、落ち着くまでだが」

シャル 「う、うん……？」

シャル 「……………」ソワソワ

グラ 「どうかしたか？ トイレなら少し距離があるのだが……」

シャル 「トイレ……っ違うよ！」

グラ 「そ、そうか」

グラ 「……………ところで一つ質問なのだが、『ガンダム』を知ってはいないか？ 『MS』は？」

シャル 「え？ え〜と、アニメか何かかな？ ごめん、よく分からないや」

グラ 「そうか。いや、すまないな。忘れてくれ」

グラ （万が一と思って聞いてみたが……悲しくも予想通り、か…）

一夏 「おい、2人とも話してないで、もっと急いでくれ。でない  
と」

「ああッ！ 転校生発見！」

「しかも、織斑君とグラハム君も一緒！」

一夏 「…ちいッ！ 言わんこつちゃない、グラハム！」ダッ

グラ 「ああ！ 行くぞ、シャルル、捕まってはことだ！」ダッ

シャル 「へ、へえ！？」

グラ 「なにをしている、ほら」ガシッ、ダッ

シャル「!!」

「逃がすかよお、そこお!」

「総員、第一種戦闘配置! これは訓練ではない! 繰り返す」

一夏（だあーっ、毎回毎回、一体何なんだよ此処は!）

「織斑君とグラハム君も良いけど、あの愛くるしさは脅威ね」

「しかも、つぶらな瞳はエメラルド!」

「きゃああっ! 見て見て、グラハム君と転校生! 手! 手繋いでる!」

「日本に生まれて良かった! ありがとうお母さん! 我が世の春が来ました!」

シャル「な、なに? 何でみんな騒いでるの?」

一夏 「そりゃ、男子が俺らしいからだろ、此処に」

シャル「……………」

一夏 「いや、普通に珍しいだろ。ISを操縦できる男って、今のところ俺達しかいないんだろ？」

シャル「あつ！        ああ、うん。そうだね」

グラ （……………）

一夏 「それに、ここほぼ女子校みたいなもんだし。男子と極端に接点が少ないから余計過熱してるんだろうぜ」

一夏 「…っと、はあ、はあ、後少しだな。此処を曲がれ」

グラ 「！？ 待て！ そこは前も」

ザッ！

「よくまあ、ノコノコと……………恐れる心がないのかい！」

一夏 「しまった、ならこっちは…」

「怯えろ！ 竦め！ 此处で一網打尽となれ！」ザッ！

グラ 「…………ふう、どうやら、やはり今回も囲まれてしまったみたいだな。さすれば…ふッ！」

シャル「ひ、ひゃあ!？」

一夏 「グラハムな」「一夏、後はよろしく頼む！」

一夏 「…………へ？」

グラ 「とくと見るが良い、その程度で私の道を阻めはしないと！ 人呼んでグラハム・スペシャル!!」ダダッ、ダン！ スタ

一夏 「誰も呼んでねーよ！ 置いてくなく!!」

「くう！ 最大の目標が!!」

「こうなったら織斑君だけでも！」

「普段接点がない我々には……」

「は、ははは……」

シャル「ポカーン……」

「フハハハハハハ！」

微かな違和感

<第2アリーナ更衣室>

プシュウ！

グラ 「ふむ、一夏、君の犠牲は無駄ではなかったぞ。無事到着だな」

シャル 「……あ、あの」

グラ 「ん？ どうした、シャルル？」

シャル 「いや、その……そろそろ降ろしてくれないかな？」

グラ 「……ああ、すまない。苦にならないからすっかり忘れていた」  
スト

シャル 「う、うん」

グラ 「なにせ、一夏とは違って軽かったからな、シャルルは。それに、なんだか柔らかかったし」

シャル「や、やわツ……!？」

グラ 「…おつと！ そんなことよりも予想以上に押ししてるな。すみやかに着替えないと、これでは一夏が無駄死になりかねん」シャル、バサツ

シャル「わあッ!？」

グラ 「？ どうした、先程から頓狂な声を上げて？」

シャル「え？ いい、いや、なんでもない。なんでもないよ!」

グラ 「ならいいが、……早く着替えた方がいいぞ。千冬女史は厳しいからな、遅れると面倒だ」

シャル「……う、うん。き、着替えるよ？ でも、その、あっち向いてて……ね？」



グラ 「？ あ、ああ、もちろんだ」クル

グラ 「……………」シュル

シャル 「……………」

グラ 「…………シャルル？」

シャル 「は、はい！？」

グラ 「…気のせいかもしれないが、その、物凄い視線を感じるんだが」

シャル 「み、見てない！ 別に見てないよ！？ き、気のせいだよ！！」

グラ 「…そ、そうか。そうだな」

グラ （…このプレッシャーは何だ！？ 圧倒された！？）

グラ 「……………」

シャル 「……………」

グラ (…なぜか、居た堪れない。 ど、どうす 「ふいふ、なんとか着いた。 もう駄目かと思ったぜ」 プシュ

一夏 「ん？ どうしたんだ、 2人とも？ 固まって。 早く着替えないとまずいぜ」

グラ 「一夏、ありがとう」

一夏 「どうしたんだよ、急に。 ああ、さっきのあれか？ まあ、気にすんな」

グラ 「いや、ありがとう。 さすが一夏だ」

一夏 「は？ どうした？ なんか気色悪いぞ」

一夏 「と、そんなことより早く着替えようぜ、 グラム。 シャルルはもう着替えてるのに」 バサ、シュル

グラ 「なに!？」クル

シャル 「あははは……」

グラ 「ISスーツ（これ）を着るのになにかコツがあるのか？」

シャル 「い、いや、別には……」

一夏 「でも、やっぱりこれ着づらいよな。裸になんきゃいけないし、水着みたいだし、引っかってさ」

シャル 「ひ、引っかって？」

グラ 「確かに、ピッタリしていて動きやすいのは良いが、窮屈だな」

シャル 「窮屈……」

一夏 「……よし、着れた。グラハムは？」

グラ 「ああ、もう大丈夫だ」

一夏 「よし、待たせたな。シャルル」

シャル 「……………」

一夏 「シャルル？」

シャル 「…は！ え？ なに？」

一夏 「いや、行くうぜ」

シャル 「う、うん」

グラ 「……ふむ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0068u/>

---

グラハム「抱きしめたいな、IS！」

2011年11月23日21時47分発行